

Title	インド北東部国境地帯のツーリズム： アルナーチャル・プラデーシュ州の現状と課題
Sub Title	Tourism of national border in Northeast India : a case study of Arunachal Pradesh
Author	脇田, 道子(Wakita, Michiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.75 (2013. ) ,p.119- 148
JaLC DOI	
Abstract	<p>A memorable year for Arunachal Pradesh should be 2012. It was the 50th year since the India–China Boundary Dispute of 1962, in which the region was in the center of conflict, the 25th year since it rose to statehood in India, and the 20th year since it was opened for tourists in 1992. In addition, the world famous travel guide book, The Lonely Planet, selected Arunachal Pradesh as the one of TOP 10 REGIONS of Best in Travel 2012. They admirably describe the state as "The last of the great Shangri-la."</p> <p>The state government is encouraged by this selection and eager to promote tourism, which appears to be the best way to generate internal revenue and increase employment as well as accelerate development. However, since the region was opened to outside visitors, tourism has developed at a slow pace. Shangri-la was the utopia imagined by James Hilton, the author of Lost Horizon. It reminds tourists of the Tibetan Buddhist world, even though Buddhists constitute only one of the state's various religious groups.</p> <p>This paper considers why Arunachal Pradesh has been unable to implement tourism development, examining both internal and external factors. In particular, I will raise the question of whether it is possible for the state to be Shangri-lagiven its Buddhist imageand whether promoting it in this way changes the situation of the border region.</p>
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000075-0119">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000075-0119</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# インド北東部国境地帯のツーリズム

—アルナーチャル・プラデーシュ州の現状と課題—

## Tourism of National Border in Northeast India

—A Case Study of Arunachal Pradesh—

脇 田 道 子\*

*Michiko Wakita*

A memorable year for Arunachal Pradesh should be 2012. It was the 50th year since the India–China Boundary Dispute of 1962, in which the region was in the center of conflict, the 25th year since it rose to statehood in India, and the 20th year since it was opened for tourists in 1992. In addition, the world famous travel guide book, *The Lonely Planet*, selected Arunachal Pradesh as the one of TOP 10 REGIONS of *Best in Travel 2012*. They admirably describe the state as “The last of the great Shangri-la.”

The state government is encouraged by this selection and eager to promote tourism, which appears to be the best way to generate internal revenue and increase employment as well as accelerate development. However, since the region was opened to outside visitors, tourism has developed at a slow pace.

Shangri-la was the utopia imagined by James Hilton, the author of *Lost Horizon*. It reminds tourists of the Tibetan Buddhist world, even though Buddhists constitute only one of the state’s various religious groups.

This paper considers why Arunachal Pradesh has been unable to implement tourism development, examining both internal and external factors. In particular, I will raise the question of whether it is possible for the state to be Shangri-la—given its Buddhist image—and whether promoting it in this way changes the situation of the border region.

Key words: national border, tourism, Shangri-la, sacred place of Buddhism, scheduled tribe

キーワード: 国境地帯, ツーリズム, シャングリ・ラ, 仏教の聖地, 指定トライブ

### 1. はじめに

本論文はインド北東部の国境地帯に位置するアルナーチャル・プラデーシュ州<sup>1)</sup> (以下、アルナーチャルと略す) に関して観光開発がどのように進められ、その過程でどのような問題が起こっているか

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

を隣接するブータンとの比較を交えつつ検討することを目的とする。インド北東部の8州<sup>2)</sup>は、国内でも最も開発が遅れた地域で、その中でも貧困線以下の世帯の割合が78.3%と最も高い<sup>3)</sup> アルナーチャルの経済発展や開発の起爆剤として必ず挙げられるのが、「観光」への期待である。豊かなヒマラヤ南麓の「自然」と、数多くの変化に富む民族集団が居住する「文化的多様性」を目玉にした観光は、雇用の創出、経済発展の手段として欠かせないとされてきた<sup>4)</sup>。しかし、現実的には、州のツーリズムは開始以来20年を経ても出発点から先へ大きくは進んでいない。その最大の理由は、アルナーチャルを中国が自国の領土と主張し、南部を走る調停線のマクマホン・ラインを国境として認めていないことにある。ツーリストは制限地域入域許可書の取得がないとアルナーチャルを旅行することができない。だが、問題はそれだけではないことを本稿では明らかにしてゆきたい。

アルナーチャルにとって、2012年は記憶に留めやすい年であった。第一は、戦場となった1962年の中印国境紛争から50年目に当たった。第二は、インドの24番目の州となった1987年から25年目を迎えた。第三は、州に外国人ツーリストが入域許可された1992年から20年目である。画期的な出来事は、ロンリー・プラネットによって、アルナーチャルが「2012年に旅行したい地域トップ10」の一つに選ばれたことであろう<sup>5)</sup>。当社は定評ある旅行ガイドブックの出版社で、推薦文は「最後のシャングリ・ラ (Shangri-La)」と賞賛している [Cruttenden etc. 2011: 65]。「シャングリ・ラ」とは、1933年発表のジェームズ・ヒルトンの小説『失われた地平線』(Lost Horizon) で主人公が迷い込んだ桃源郷の名で、架空の地名だが、原作の映画化 (1937年) で有名になり<sup>6)</sup>、理想郷の代名詞として使われるようになった。元々はチベットには理想の仏教国「シャンバラ」の伝説があり、それが源流だという [石濱 2005:18]<sup>7)</sup>。ロンリー・プラネットは「アルナーチャルは、伝説の秘匿された仏教聖地ペマコと噂されている」と説明して [Cruttenden etc. 2011: 67]、大河ヤルンツァンボ河の東端の屈曲部にある実在の地、ペマコを「シャングリ・ラ」と重ね合わせて現実味をもたせ、仏教の聖地としてツーリストや巡礼の訪問が期待できると考えている<sup>8)</sup>。州政府は、ロンリー・プラネットの紹介を起爆剤として観光の推進を切望している。2012年2月8日から2日間、州都イタナガルで開かれた「観光会議」でトップ10入りが報告され (2012年2月9日付、地元紙Arunachal Echoウェブ版)、3月13日にカナダのオタワで開催された産業博覧会で州首席がトップ10入りと「最後のシャングリ・ラ」を強調し、州への投資を呼び掛けた (3月15日付Arunachal Timesウェブ版)。

同様な出来事はブータン王国でも起こった。外国に門戸を開いた1974年に『ナショナル・ジオグラフィック』が「最後のシャングリ・ラ」[Scofield 1974: 570]と形容したのである。「シャングリ・ラ」イメージがどの程度効果的であったかは不明だが、30年以上経た現在、観光業<sup>9)</sup>は大きく成長し、ロンリー・プラネットの2012年の観光地「トップ10の国」に選ばれている。アルナーチャルは「第二のブータン」への道を歩むことができるのだろうか。観光開発にとってイメージの創出は重要な課題であるが、アルナーチャルでの「観光の創出」の現場をたどることで、今後の行方を検討してみたい。

## 2. 観光人類学の視座

本論文では、インド北東部の辺境でのツーリズムへの模索の過程を動的にとらえて考察する。具体的な事例の検討に入る前に、観光に関しての近年の研究を整理しておく。

観光研究の基礎を築いたとされるジャファリ (Jafar Jafari) は、観光の変遷を年代に対応して四つの基盤 (platform) に整理した [Jafari 2001: 29-32]。それは、①擁護の基盤 (1960年代まで。観光を恩恵

をもたらすものと位置づける), ②警告の基盤 (1970年代。マス・ツーリズムに関する弊害を指摘), ③適正の基盤 (1980年代。オールタナティブ・ツーリズム, エコ・ツーリズムの試み), ④知識ベースの基盤 (1990年代前半。持続可能なツーリズム。相互の対話と認識の共有) である。大きな転換点は世界的な規模で観光が広がった1970年代で, 特にマス・ツーリズムの悪弊を改善する試行錯誤が続いた。

バレーン・L・スミスは観光人類学の観点を導入し, 70年代の観光活動を対象として, ゲスト (訪問者) とホスト (受容する地域社会) の相互関係の中で生じる現象を論じた。それは異文化交流であり, そこに引き起こされる文化変容の研究は文化人類学の大きな課題であった。そして, ホストとゲストの間に格差があり, ゲストがホストに与える影響が圧倒的で, 特に資本主義の価値観の導入が環境破壊につながるなど問題点が指摘され, 経済的な影響が文化変容の大きな要因であることを明らかにした。また, 文化が「対象化」「客体化」され, 操作され, 商品化が起これば, 文化は誰のものか, 文化を利用するとは如何なることか, 地域文化の活性化や開発への寄与とは何かが問い直される契機になった。

スミスは観光行動を①少数民族観光, ②文化観光, ③歴史観光, ④環境観光, ⑤レクリエーション観光の五つに分類して考察を加えた。①の「少数民族観光」は地元の人々の習慣がゲストには「風変わりな面白い (quaint)」ものを対象とする観光で, 家や村を訪問し, 舞踊や儀礼を見物し, 工芸品を買うなどの行動を伴う。②の「文化観光」は家屋・織物・民具・手作りの工芸品など消滅しつつある生活の名残や地方色に美しさや楽しみを求める。③の「歴史観光」は記念碑や建築物, 大寺院, 遺跡などを見学して過去の記憶を呼び覚ます。④の「環境観光」は地域社会の伝統的な生活や物質文化が, 自然環境にどのように適応し共存しているかを見る。⑤の「レクリエーション観光」はスポーツ, 日光浴, 温泉浴, 食事などを楽しんで休養する [Smith 1989: 4-5]。相互の分類は重なり合っているが大きな目安にはなる。

日本では, 橋本和也が観光を「巡礼」と同一視したり, 国家政策や民族問題との関連に焦点を当てる議論とは異なり, 観光という概念を, 「異郷において, よく知られているものを, ほんの少し, 一時的な楽しみとして売買する」商品として定義し直して考察した [橋本 1999: 2]。ホスト・ゲスト論を, 相互が作り出す「観光文化」に焦点をずらして考えたのである。山中弘は, 定義に関しては, 「やや狭すぎる」としながらも観光のもつ「断片性」, 「刹那性」, 「商品性」を強調したと好意的に分析し, さらに宗教との関わりからツーリズムという用語を使う場合に念頭におくべきことを三点挙げている。その第一は, 日常体験から離れた (異郷) への旅であること。第二は, 旅の代価として金銭を支払う消費行動であること。第三は, 特定の場所をめぐる営みであることである。ツーリズムは単なる異郷への旅ばかりではなく, 訪れるに値する「場所」への旅が多く, 目的地も単なる旅が目的ではない。宗教との関わりで言えば, 聖地のように特別なものが多く, その地に居住する人々にとってのアイデンティティに深く関わることを考慮すべきだ [山中 2012: 6-7] と主張している。

一方, 移動と貧困の観点からの観光研究の見直しがある。発展途上国のツーリズムの問題点として, 高寺奎一郎は, 「国際ツーリズム現象こそが, 20世紀後半を特徴づけ, かつ21世紀の人類社会に大きな影響を及ぼしうる人類の移動の形態」 [高寺 2004: i] と述べ, 移動を貧しい人びとに利益をもたらす方法として検討する必要性を説く。国際ツーリズムはグローバル化の重要な要因で, 従来の「開発＝欧州のライフスタイルの普及」という概念に疑問を提示する。つまり各地の個性を保護しつつ進めるツーリズムに魅力があるとすれば, 従来の開発とは矛盾が生じる。高寺は近代化は貧困削減が前提条件という

立場に立って、途上国でのツーリズムのプラスとマイナスの効果を指摘する。プラスの効果は外貨の獲得、雇用の創出、国の収入源の多様化、インフラの整備であり、マイナスの効果は開発されたリゾートに生業を捨てた過剰な人口が流入し、社会構造へ悪影響を及ぼして環境問題を引き起こすと指摘する。問題の調整にあたっては、地元と旅行者の間に立つ援助機関の適切な関与が必要で、地元の人々の不信感や理解不足などの問題解決に役立つという。「貧しい人々に利益をもたらすツーリズム」(Pro-Poor Tourism)を「持続可能なツーリズム」とする試みが紹介されている。地理的条件、自然災害、政治的・経済的などの外部要因の脆弱さ、インフラ整備の遅れ、人的資源開発の遅れなどの構造要因が指摘されている[高寺 2004]。江口信清、藤巻正巳なども発展途上国での貧困対策に特化した観点から問題を呈示している。江口は1980年代後半から現れたオルタナティブ・ツーリズム(alternative tourism)に関して、自然環境・地元民・観光客・観光関連産業といった、観光関連の全ての主体に利益をもたらす、「金の卵を産むメンドリ」という見解に疑問を投げかけた[江口 2010: 9-40]。藤巻はマレーシアの先住民のツーリズムとの関わりを報告し、「観光を通じた社会的弱者の自立と自律」に向けた取り組みに期待している[藤巻 2010: 215-248]。江口と藤巻の共通点は、ホスト側の現地住民、例えば少数民族を「社会的弱者」として扱うことである。ただし、少数民族が常に「社会的弱者」であるわけではなく、強弱は相対的である。

アルナーチャルの事例を観光人類学の研究の中に位置付けて考えれば、ホストとゲストの関係は「観光文化」を生成するまでに至らず、資本主義の影響も軽微であり、環境問題も今のところ、さほど深刻ではない。今後採用されるべきツーリズムの選択肢は、民族観光<sup>10)</sup>、文化観光、環境観光の三つで、歴史観光やレクリエーション観光の導入は現地での工夫次第となるだろう。特に民族観光、つまりエスニック・ツーリズムや、宗教とツーリズムという主題はアルナーチャルでは可能性のある観光形態であり、州政府もよく認識している。また、本稿は少数民族の位置づけについても問題を提起する。アルナーチャルは開発の遅れた内陸地にあり、インドでは中心に対する周縁に位置付けられ、住民の多くは、政府の優遇政策を受けている指定トライブ(Scheduled Tribe)である。広大なインド全体から見れば少数派で社会的弱者である。しかし、州行政の担い手は、州人口の多数派の指定トライブ出身者で、その中にも多数派と少数派が存在する。観光キャンペーンの「シャングリ・ラ」は、チベット仏教のイメージが強いが、仏教徒の民族集団であるモンパやメンバなどは州の全人口比では少数派である。但し、タウンのような特定の居住地域では立場は逆転して支配的存在となる。2012年現在、州の観光大臣がタウンのモンパ出身のため、観光の文脈ではモンパは周縁的ではなく、観光開発の主体を担う人々もいる。観光開発の主体はイタナガルに本部を置く州政府の観光省(Directorate of Tourism)に委ねられていて、インド政府は直接には関与しない<sup>11)</sup>。ツーリズムを貧困克服の手段とするには、地元での状況把握があまりに不完全で、インフラも未整備で多くの課題が残されている。

「シャングリ・ラ」を観光のイメージ戦略とする発想には既に前例がある。それは中国雲南省の<sup>ディチェンチベット</sup>迪慶藏族自治州の中甸で、2002年5月に「シャングリ・ラ」(香格里拉)と改名して架空の地名を實在の地名とし、イメージ戦略に組み込んだ。『失われた地平線』[Hilton 1933]の作者のヒルトンが執筆時に参考にしたのは、1920年代から30年代に『ナショナル・ジオグラフィック』誌に掲載されたジョセフ・ロック(雲南省麗江近郊に20年以上滞在した植物学者・民族学者)の報告であり、「ヒルトンは、ロックの著作を参考にしたのだから、小説の舞台は雲南省西北部だ。」と中甸政府は主張した。ヒルトン自身は、ロックの報告を参考にした可能性はあるが、シャングリ・ラのモデルがどこかは明言してい





図1 インド北東諸州

ない [Kolas 2008: 7]。また、ロックはチベット文化研究者ではなく、<sup>ナシ</sup>納西族(ナシ族)の調査、特に絵文字のトンパ文字を紹介した『ナシ語—英語百科全書』などで知られている。「シャングリ・ラ」は架空の地であるにもかかわらず、地方政府が学者を含む大掛かりな調査隊を送り、強引にモデルだと主張して改名した。その決定的な証拠となったのは、調査隊がアメリカの航空機<sup>12)</sup>の残骸を見つけたこととされる。しかし、機体は実際にはヒルトンが小説を書いた後の第二次世界大戦中の輸送機だという [Kolas 2008: 6]。雲南の「シャングリ・ラ」は、急速な観光地化によって、建物から土産物に至るまで「チベット風」に改められたが、逆にチベット人の反感を呼び起こして、民族のアイデンティティ・ポリティクスが争われる場所になった [Kolas 2008: 120-129]。

アルナーチャルの状況は中国とは全く異なるが、架空の場所「シャングリ・ラ」が観光のイメージ戦略として使用された場合、どのような事態が想定されるのかについても検討したい。

### 3. 調査地の概況

#### 3-1 人と風土

アルナーチャルは、インドの北東端に位置し、南はアッサム州とナガランド州に接し、面積は83,743km<sup>2</sup>、人口は、1,382,611人(2011年統計)である。面積は北東7州(図1)の中で最大であるが、人口密度は17人/km<sup>2</sup>と最小である。州都はイタナガル(標高350m)で行政、商業の中心となっている。国境地帯に位置し、東はミャンマー、西はブータン、北は中華人民共和国(西藏自治区)に接している<sup>13)</sup>。

年間降水量は平均2,000mm、5月から10月までは雨季(6月と7月が最多)、半年間が高温多湿で、冬は北部の山岳地帯は雪で峠が閉鎖される。3月から4月、10月から11月の4カ月間は乾季である。大量の雨水の浸食による深い渓谷と複雑な山岳地形のために、道路は十分に整備されていない。航空路はヘリコプターのみで鉄道はない。インフラの未整備が経済的後進性の大きな要因である。

住民の58.44%は農業に従事しているが、州全体の耕作可能な土地は5%に過ぎない。コメ、トウモロ



図2 アルナーチャル・プラデーシュ州

コシ、コムギ、アワが主たる穀物で、ジャガイモの栽培も大きな収量は見込めない。コメや野菜の多くは、アッサムから運ばれている。低地は亜熱帯に位置し、果樹栽培や花卉栽培、キノコ、カルダモンやコショウなどの小規模農業の成長が期待されている [Gaur & Rana 2008: 210-214]。豊富な水と高度差を利用した水力発電に期待がかかっている。しかし、大型ダム建設は、地元住民や下流域のアッサム住民の反対などで容易には進まず、電力不足は深刻である。

アルナーチャルは17の県 District に分かれる (図2)<sup>14)</sup>。住民は多くの民族集団から構成され、インドの行政用語の指定トライブ Schedule Tribe<sup>15)</sup>、略称STに登録され、705,158人である (2001年統計)。STは、インド憲法で公的雇用と公職、教育、議席の三分野で優遇措置が留保される。主に少数民族が多いという [押川 1995: 33-34]。STと同様にカーストの最底辺に対しては、指定カースト Scheduled Cast, 略称SCの制度があるが、アルナーチャルの特徴は、他の北東諸州と同様にSTが多数派である点である [押川 1981: 26]。州全体の64.22% (2001年統計) を占めている。人口には国境警備に当たる軍人の数も含まれるので、トライブの割合はもっと高い。

民族集団の構成は、25のトライブと100以上のサブ・トライブからなり、ニシ (Nyisi) が23%、アディ (Adi) が17%、ガロ<sup>16)</sup> (Galo) が10%で三者だけで全体の半数を占める<sup>17)</sup>。行政上のトライブの名称は自称と他称が入り乱れ、変更も起こっている<sup>18)</sup>。宗教別では、ヒンドゥー教34.6%、その他30.73%、キリスト教18.72%、仏教13.03%、イスラーム教1.88%、未回答0.85%、シク教0.17%、ジャイナ教0.01%の順である。仏教は、モンパ (Monpa)、シェルドウクペン (Sherdukpen)、メンバ

(Memba), カンバ (Khamba) のチベット系大乘仏教と、カンブティのタイ系上座部仏教に大別され、人口比では前者が82.2%, 後者が17.8%である。

### 3-2 インナー・ラインとマクマホン・ライン

アルナーチャルはイギリスの植民地時代とインドの独立を経て、チベットや隣国ブータンとの文化的連携が断絶し大きく変化した。国境紛争の舞台となり、南のインナー・ラインと北のマクマホン・ラインという二つの境界線が引かれた影響は極めて大きい。歴史的経緯は以下の通りである。

平地のアッサムでは13世紀以降にタイ系のアホム王国が栄えていたが、イギリスの侵入で1838年に滅亡した。イギリスは茶の本格的なプランテーション経営に乗り出した。一方、周辺の民族集団は法律による統治は困難と判断され、アッサムの「英国臣民」と「野蛮な部族」を隔てるために1873年にインナー・ラインが引かれ、許可証を持たない者の立ち入りを禁止した [Gait 1926: 334]<sup>19)</sup>。

イギリスは山岳の部族地帯を重要視していなかったが、20世紀に入って中国との国境線を明確にする必要が生まれ、1914年にシムラー会議が開催され、イギリスと当時のチベット政府の協議の結果、マクマホン・ラインと呼ばれる国境が設定された。1947年にインドは独立し、1950年に憲法が施行されて、アルナーチャルはアッサム州知事の管理下に置かれた。1954年には全ての辺境地域は北東辺境管区 (North East Frontier Agency: 通称NEFA) としてアッサムから分離された。

インドは独立後、マクマホン・ラインを踏襲したが、1949年成立の中華人民共和国は国境線として承認しなかった。1962年に中国が示威行動に出て国境地帯で戦争が勃発し、西部のラダックと東部のNEFAのタワン県、西カメン県が主たる戦場となった。紛争は短期で終了し、現在はインドがラインの南部を実効支配しているが、中国は一貫してアルナーチャルのほぼ全域を自国領と主張している<sup>20)</sup>。1972年にアルナーチャル・プラデーシュとして中央政府直轄地となり、1987年に州に昇格した<sup>21)</sup>。インドの北東部は、「行政的に最も困難な問題を抱えている地域のひとつで、アジアの火薬庫だ」 [Nair 1985: 7] という状況は継続している。2012年2月20日にイタナガルで開催された州成立25周年の記念式典では、中央政府からアントニー国防大臣が派遣され主賓として演説を行ったことは、軍事的重要性を象徴的に示している。しかし、アルナーチャルは、隣接するナガランドとは異なり、分離独立運動はなく中央政府との関係も良好で、「北東諸州の中では最も平和だ<sup>22)</sup>」とされてきた。

一方、インナー・ラインは、インド独立後も維持されている。目的は外部者との交易の制限と、土地所有の拡大を防止して、ドライブの「土地」や「森林」を保護するという認識に支えられていた [Elwin 1959b: 66] [Füerer-Haimendorf 1982: 288]。現在でも入域に際しては州外のインド国民の場合はインナー・ライン・パーミット (Inner Line Permit: 略称ILP)、外国人は、制限地域許可書 (Restrict Area Permit: 略称RAP) の申請と所持が義務づけられている。

以上、述べてきたインナー・ラインとマクマホン・ラインの二つの境界線は、アルナーチャルのツーリズムの考察にあたって基本的に考慮すべき要点である。

## 4. 観光の現状

### 4-1 インドの辺境開発とアルナーチャルの観光政策

アルナーチャルは1992年から外国人ツーリストを初めて受け入れた。開放の理由は明らかではないが、インド政府のルック・イースト (Look East) 政策とそれに基づく開発計画との関連が考えられ



表1 アルナーチャルの観光客数の変遷

年	国内から	海外から	合計 (人)
1999	2,092	86	2,178
2000	3,126	129	3,255
2001	4,644	78	4,722
2002	6,878	137	7,015
2003	3,632	438	4,070
2004	39,767	321	40,088
2005	50,560	313	50,873
2006	80,137	706	80,843
2007	91,100	2,212	93,312
2008	149,292	3,020	152,313
2009	195,147	3,945	199,092
2010	227,857	3,395	231,252

(2011年8月現在の州政府観光省よりの資料をもとに筆者作成)

る。この政策は冷戦後の1991年にインドの首相に就任したナラシンハ・ラーオが、外交の軸足を東アジア、東南アジアに向けたことによる。東南アジアの玄関口として北東8州に積極的に関わった。しかし、北東インドの開発政策の具体化は遅れ、2008年7月発表のNorth East Region Vision 2020が試行されている<sup>23)</sup>。アルナーチャルの観光は当初から政治との関係が色濃かった。

観光の資料として、1999年から2010年までの観光客の統計(表1)はあるが、数字はあまり信頼できない。外国人は、観光、研究調査、ビジネス、聖地巡礼など目的の如何にかかわらずRAPを取得しての入域が義務で、RAPのコピーは州の入域管理事務所、観光局、警察署、中央政府の内務省にも送られる。RAPには滞在期間と訪問場所が記載され、現地のツアー・オペレーターが派遣するガイドの同伴が義務付けられる。国防関係施設の写真撮影は禁止、キリスト教の伝道活動も禁止で、旅行は特定の地域に限られ、バックパッカーのような自由な行動は原則的にはできない<sup>24)</sup>。RAPが規定する最低人数や滞在日数、許可料は、1992年は4人以上の集団で期間は、10日間以内、一人200米ドルであった。現在は、2名以上で1ヵ月間、許可料は一人50米ドルとなっている。しかし、人数に満たない場合には、最低人数分の許可料を支払えば許可が出るので、上記の数字は実態を反映しているわけではない。訪問者の国籍や旅の目的に関する統計資料はなく、実情はつかみにくい。

北東部8州の2010年の海外からの観光客の概数は、シッキム21,000人、アッサム15,000人、トリプラ5,000人、メガラヤ4,000人、アルナーチャル3,000人、ミゾラム、ナガランドが1,000人、マニプルが1,000人以下という順である(インド政府観光省の資料による)。表1では、2004年以降、国内からの観光客が急増しているが、理由はヒンドゥー聖地への巡礼者数を算入したからである。州の南東部、ロヒット(Lohit)県のヒンドゥー教の聖地パルシャラーマクンダ(Parshuram Kund)の祭礼には、毎年1月に多くの巡礼者が訪れ、2011年には7万人、2012年には7万5千人を超えたという(Arunachal Times ウェブ版 2012年1月16日付)。しかし、巡礼者の多くは、テントや食料を持参して

いるので、観光への経済的貢献はほとんどない。

ただし、一般の国内ツーリストの増加は事実のようだ。それは、インドの公務員の休暇旅行に対する旅費の割引制度（Leave Travel Concession: 略称LTC）による。公務員が国内の自分の出身地や他の地区に旅行する場合に鉄道運賃が無料になる制度である。LTCは1988年に導入され、2008年5月2日に改訂され、北東8州への旅行の航空運賃も無料になった<sup>25)</sup>。国営航空会社限定でエア・インディアのみに適用だが、アルナーチャルに最も近いグワハティまでの利用者は増えているという<sup>26)</sup>。しかし、国内旅行客は、乗り合いバスや安宿を使うことが多く、地元のツアー・オペレーターやホテルは多くの利益を得られない。炊事道具一式をホテルに持ち込み自室で自炊するグループまでいるという。

#### 4-2 ツーリズムの問題点

国の方針を反映して州でも観光の重要性を認識し、81.9%という森林被覆率を誇る自然の豊かさを利用したエコ・ツーリズムを推進し、ドライブの共同体の文化保護の手段として利用しようと試みている。しかし、2012年現在で軌道に乗っている企画はない。国の計画委員会が観光の発展の問題点として挙げているのは以下の4点である [Planning Commission 2009: 246]。

- ① インフラが未整備で、空港と鉄道がなく、道路も少ない。快適に過ごせる宿泊設備が少ない。
- ② 州への入域に内務省へのILPやRAPなどの申請が必要である。
- ③ 政府によるマーケティングや観光促進への協力が不足し、州の魅力が外部に伝わらない。
- ④ アッサムでの度重なるゼネラル・ストライキなど、政情が不安定である。

それぞれについて、具体的に検討してみたい。

##### ① インフラの未整備と遅れ

道路は州平均100平方キロあたり18キロで、インドの平均75キロに遠く及ばない。州への出入り、東西の移動の道路がなく、多くの場合、アッサム経由である。アッサムからタウンまでの道路は、軍事道路で、大型の軍用トラックが道路の耐用年数を短くしている。一般車は、トラックが壊した道路の陥没にタイヤをとられる。道路が未整備なのは、請負制度に原因があり、道路工事の責任を担う国境道路公団 Border Road Organization (略称BRO) に多くの苦情が寄せられている<sup>27)</sup>。BROと工事を請負う地元業者との金銭的な癒着が常に地元の噂になっている<sup>28)</sup>。州を縦断する幹線道路の整備は数年前から計画中であるが、実現には相当な年月を要する。

空路の開設が望まれているが、広い平地がないこと、マクマホン・ラインに近いことを理由に、民間機用の空港の開設は実現していない。代わりに数年前からヘリコプターがグワハティとタウン、そしてイタナガル間で運行を開始した。インド国内のツーリストはこの路線を利用していたが、2010年から11年にかけて、5ヵ月で3回もの事故が起き、州の観光には大きな打撃となった。2010年11月19日に空軍のヘリコプターがタウンで墜落し12名が死亡、2011年4月19日にグワハティからのヘリコプターがタウンに墜落し18人の乗客と5人の乗員が死亡した。乗客の大半はインド人ツーリストであった。当時の州首席大臣のドルジ・カンドウ (Dorjee Khandu) 氏は、犠牲者に哀悼の意を表し、負傷者への見舞いの言葉を送ったが、彼自身、4月30日にタウンからイタナガルに向かう専用機が墜落して、パイロットを含む5人全員が死亡し、自らが犠牲者となった。事故後、ヘリコプターの運航は休止され、2011年9月12日から運営会社を変更してグワハティ・イタナガル間は再開したが、タウン路線は停止が続く。事故は、直接的・間接的に州のイメージを大きく損なった。観光の推進役の首席大臣が皮肉に

も事故死して逆宣伝をしてしまった。タウンでは「ヘリコプターがないので、政治家や役人もみな陸路でタウンへ来なくてはならない。彼らが悲惨な道路状態を見る良い機会だ」(2011年夏の調査時)と言う人がいた。路の悪さに辟易していた住民は、タウンのモンパ出身で人望のあった首席大臣の死を悼みつつも、インフラ整備の遅れを行政の怠慢として不満に思っている。

ホテルは、近年、幹線道路に面した町などに次々に建設されている。しかし首都から離れた遠隔地では、電力供給に問題がある。停電すれば、照明、暖房機、テレビ、携帯電話、カメラの充電ができずツーリストに影響は大きい。携帯電話がつながりにくいのは州の全体の共通問題だが、国境地帯では軍事的な理由から通信用アンテナを立てる場所の制限が多く、電波が届きにくい。道路や電気などのインフラは、地元の人々の生活に不可欠で、観光以前の問題であるが、いまだに不十分である。

### ② 入域申請の障害

RAPの申請には、インド査証を早めに取得して、コピーをインドに送らなくてはならない。現在はインターネットが普及してRAPは1週間ほど、ILPは1～2時間と時間は短縮されている。ただし、許可申請に時間がかかり、ツーリストには面倒である。ナガランドでは、2003年から州都コヒマの近郊で毎年12月にホーンビル・フェスティバルという有名なイベント祭を開催し、2011年にはRAPを一時的に免除して外国人ツーリストの便宜を図った〔小磯・遠藤 2012: 63-66〕。しかし、アルナーチャルの場合は期待できない。ILPはアルナーチャルのSTには、簡単には撤廃されては困る生命線であるが、これによる隔離・隔絶が地域の孤立性を助長した〔井上 2008: 61〕ことも確かである。

2010年10月3日から6日まで、タウンで「アルナーチャル観光会議」(Arunachal Travel Congress)が開かれ、州首席大臣、州観光大臣、観光局次官、州内のツアー・オペレーターなど合計157人が出席して、観光推進策が検討されたが前進していない<sup>29)</sup>。2010年に州の観光局長は、「国内ツーリストの増加にILPが障害になっていることは認識しているが、自分たちの権益を守るためにもインナー・ラインによる制限は必要だ。制限がなくなれば、ドライブの土地は商売上手な州外の人々に取られてしまうだろう」と述べたが、多くの住民の意見も同様である。実際にはアルナーチャル内部にも他州出身の人々が多く住みついて商店などを経営し、割合は年々増加している<sup>30)</sup>。ただし、彼らには永住権と土地の所有権はないので、政治、経済、文化に与える移住者の影響や紛争は今のところは少ない<sup>31)</sup>。

### ③ 観光宣伝の未成熟

宣伝に関しては、州観光局にも責任がある。現地の事務所で入手できる資料は、ツーリスト(国内と海外)の数字表だけで、滞在先や旅行ルートなどの細かなデータは皆無である。隣国のブータンでは、観光局による年次報告書が発行され、ツーリストの数、宿泊地、行動などを細かくデータ化し、分析を加えて戦略を練っていて全く異なる。アルナーチャルの公式ホームページは一般的な情報だけで、祭があると紹介しながら、日時や場所、内容の記載は全くない。2012年1月現在、州には69のツアー・オペレーターが登録されているが、ライセンス所持だけで全く実績のない休眠会社も含む。常時にツーリストを扱う会社は15～16社程度で、取り扱い人数の資料はない。比較的扱い数が多いT社も、年間扱う外国人ツーリストの数は50人未満である。殆ど全ての会社はオーナーが1人で営業から手配をし、ガイドやドライバー、トレッキング用のスタッフを臨時で雇う零細企業である。ツーリズムを運営する情報が収集されておらず、発信するノウハウやネットワークができていない。

### ④ 政情の不安定

アルナーチャルへは必ずアッサムを通る。しかし、アッサムは政情が不安定である。例えば、イギリ

スはアッサム、マニプルと周辺州への注意、アメリカはアッサム、マニプルで爆弾テロ<sup>32)</sup>の標的にされる可能性があるとして警告し、日本政府は「渡航の是非を検討して下さい」という危険情報をマニプル、アッサム、ナガランド、トリプラ、メガラヤ4州に適用している<sup>33)</sup>。アッサムや近隣州への渡航に関しての治安の不安定さは海外の旅行会社にとっては無視できない<sup>34)</sup>。

以上の四つの問題点は早急には解消できそうにないが、ツーリズムは徐々に進んできた。

#### 4-3 村落観光(Village Tourism)の限界

現在、州には州政府観光局が許可している下記の11の周遊コース (Government Approved Travel Circuit) がある。あくまでもモデルコースで、これ以外に登山やトレッキングコースもある。

州政府観光局が推奨する11の周遊コース (2012年1月現在)

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Tezpur-Bhalukpong-Bomdila-Tawang (西カメン県, タワン県)</li> <li>2. Tezpur-Seijosa(Pakhui)-Bhalukpong-Tipi-Tezpur (西カメン県, 東カメン県)</li> <li>3. Itanagar-Ziro-Daporijo-Aalo-Pasighat (パプン・パレ県, 下スバンシリ県, 上シアン県, 西シアン県, 東シアン県)</li> <li>4. Doimikh-Sagalee-Pake Kessang-Seppa (パプン・パレ県, 東カメン県)</li> <li>5. Ziro-Palin-Nyapin-Sangram-Koloriang (下スバンシリ県, クルン・クメイ県)</li> <li>6. Dapolijo-Taliha-Sayum-Nacho (上スバンシリ県)</li> <li>7. Aalo-Mechukha (西シアン県)</li> <li>8. Pasighat-Jengging-Yingkiong-Tuting (東シアン県, 上シアン県)</li> <li>9. Tinsukia-Tezu-Hayuliang (アンジャウ県, ロヒット県)</li> <li>10. Dibrugarh-Roing-Mayudia-Anini (下ディバン谷県, ディバン谷県)</li> <li>11. Margherita-Miao-Namdapha (チャンラン県)</li> </ol> |
|---|

モデルコースは17県のうち15県をカバーし、ティラップ (Tirap) 県とロンディン (Longding)<sup>35)</sup> 県は、治安上の理由から不可である。しかし、実際には11番目コースのチャンラン県も明記された場所以外には行くことはできない。ツーリストが比較的多く利用するのは、1.と3.の二つのコースだけで、その他はごく限られている。多くは祭りでもない限り、ツーリストを惹きつける観光資源が少なく、道路や宿泊設備も未整備である。あえて網羅したことは、各県やそこに住むトライブの観光への期待に配慮した結果であろう。「シャングリ・ラ」に関わりがあるのは、1. 7. 8. のコースである。

1992年に州が外国人を初めて受け入れた時に許可したコースは、上記の3. である。イタナガルを出発して東部のアパ・タニ、アディ、ガロ、タギンなどのトライブの住む町や村をめぐる。異なる民族集団の生活を見たり、触れることを重視する。通常は民族観光 (ethnic tourism) に分類されるが、アルナーチャルでは村落観光 (village tourism) と呼ぶ。州の観光大臣はその拡大のために、特定の村を選定してインフラを整える意向を発表したが (2011年5月31日付 Equitable Tourism Options ウェブ版)、実現はしていない。現在、最も人気が高いのは3. であるが、行き当たりばったりで途中の村に立ち寄る形式がほとんどで、特定の村が事前に指定されることはない。車やホテル、ガイドを手配する地元のツアー・オペレーターのオーナーも大半がトライブで、自分の出身地か近隣地域の手配や案内を得意とし、旅の満足度はガイド次第である。ガイドもライセンス制度や訓練の機会がないので、外国人には単



写真1 鼻栓をつけ、入れ墨をしたアパ・タニ女性 (2012年11月)  
 ※以下、本稿の写真はすべて筆者撮影

なる通訳の役目しか果たさないことが多い。見て触れる実体験に関してはホスト側の入念な準備が必要である。伝統的な村での生活を観光資源とする村落観光は、生活の近代化の進行が進めばツーリストの興味は減少するという矛盾を孕む。

一方、イタナガルのジャワーハルラール・ネルー州立博物館には、各トライブの「伝統的な生活風景」を民族衣装の人形で展示している。観光省作成の案内書の写真も同様である。ゲストのツーリストには「珍しい」と感じさせるまなざしは、展示や写真を通して視覚的に対象化され把握される [Urry 1990: 7]。しかし、実際には、展示や写真の通りの生活が、現地にそのまま残っているわけではない。

例えば、アルナーチャルの代表的なトライブのアパ・タニの村、ズィロ (Ziro) は急速に変化を遂げた。1940年代にイギリス植民地政府の行政官としてこの地に赴いたハイメンドルフは竹製のベランダ付きの伝統家屋に住み、額と顎に入れ墨をし、左右の小鼻に黒い木の栓をした女性 (写真1)<sup>36)</sup>の様相を記述している。しかし、伝統家屋も女性の入れ墨や鼻栓も筆者が最初に訪問した1995年に比べ、2012年では減少が著しい。その理由は、数度の火事があったこととアパ・タニ自身の意識の変化による。1973年に「アパ・タニ青年協会」(Apa Tani Youth Association) が組織され、翌年、社会改革の規則が作成された。文化と伝統を守るのが目的で、幼児婚などの悪習を断つことや、「鼻に穴をあけ、顔に入れ墨をする習慣の廃止」も盛り込まれていた [Fürer-Haimendorf 1980: 205-209]。この結果、入れ墨や鼻栓をする女性が減った。村の外で教育を受けた若者たちは、電気もない竹やニッパヤシの高床式住居に家族全員が雑魚寝する暮らしは望まない。アディの例でも男性の若者は学校の制服に憧れを持ち、インドの他州と変わらない洋装を好み、籐で編んだ男性用の帽子は「古くさい」として避ける [Mibang 1994: 194]。地元の人々が風俗習慣を対象化して考え直す「再帰的近代化」がアルナーチャルにも出現している。

一夫多妻の慣習のあるニシの高床のロングハウスは、妻たちが各自の炊事用炉端を持ち、炉端が間仕切りである。複数の妻を持つ家を十数年ぶりに再訪すると、若い妻たちは子どもの教育のために町にある別宅に住み、夫とは別居中だという。彼女たちの炉端も長い間使用された形跡がない。アディの場合



も他のトライブからの襲撃を避けて、集落はかつては山上や斜面に作られていたが [Mibang 1994: 44], 攻撃の心配がなくなり、道路が建設され、学校や病院が建てられると、交通の便がよい所に新たな集落が形成された。近代化がもたらす教育・医療、そして電気や水道を利用する時代に入った。変化に対応して「伝統文化」が意識化されるが、実際には急速に消滅している。

観光は旧来の生活様式の急激な変化の過程に生じる現象である。「民族文化」や「伝統文化」を資源とした観光がツーリストに対して組織的にディスプレイされる [瀬川 2003: 1]。観光は異文化交流を通じて、ホストとゲストの間に観光文化を形成して変化を加速させる。中国の場合は極端で、国家が指導し、資金を投入して観光を資源として開発に結び付ける動きが顕著である。民族文化村、民族風情観光活動区、自然景観と民族を組み合わせた観光コース、イベントとして仕掛けられた民族の祭り、民族博物館、民族観光商品市場などの設置が定番である。一部では成功を納め、経済効果も高まったというが [馬 2003: 119-134], アルナーチャルには当てはまらない。

#### 4-4 官製イベント祭の実態

アルナーチャルでは、トライブの多様性を民族衣装や踊りで見せるイベント祭が何度か実施されてきた。しかし、ナガランドとは異なり、内外のツーリストを呼び込んで毎年継続されている企画は今のところない。ブータンでは、1年以上前から政府観光局が各地の寺院の大小の祭礼を一覧表にして内外に発表するが、アルナーチャルにはない。州政府主体の官製イベントは計画性のない急ごしらえのものが多。例えば、ここ10年間、断続的にタウンやボムディラなどのモンパの居住地では、ブッダ・マホツァヴァ (Buddha Mahotsava)<sup>37)</sup> とよばれる観光促進のためのイベント祭が行われてきた。2003年10月にタウンで見学したが、当時RAPの手配を頼んでいた現地のツアー・オペレーターからの事前の情報はなく、偶然に居合わせた。民族衣装のファッションショーやモンパの歌や踊りにムンバイからきた歌手の歌謡ショーが加わり、地元の人々には大きな楽しみとなっていたが、ツーリストの姿はなかった。このイベントは、2012年10月には名称を「タウン・フェスティバル」と変えて、26日から30日まで大々的に開催された。その目的は、「州のツーリズムを盛り上げるため」で、タウンが会場となったのは、現職の観光大臣のお膝元であったからだと言われている。2011年にヘリコプター事故で亡くなった州首席大臣は、タウンの出身であるが、氏の没後にその選挙地盤を継いだ長男のペマ・カンドゥ氏は現在、州の観光大臣になっている。

州各地のトライブだけでなく、マニプル、ミゾラム、ナガランド、ブータンなどからも歌舞のグループを迎え、歌や踊りが披露されたが、数も質も5日間持ちこたえるほどではなく、毎日通った地元の人々には不評であった。州知事、州首席大臣などは来賓として出席していたが、肝心のツーリストは国内から30人前後、海外からは6人ほどで大半がイベントのことは知らず、偶然にタウンを訪れていただけであるという<sup>38)</sup>。実施決定は2カ月前の8月下旬で、直前まで各方面への通知はなくツーリストが少ないのは、至極当然であった。ツアー・オペレーター協会の会長のJ氏によれば、「政府がやることはいつも無計画で、宣伝期間などなにも考えていない。金の無駄遣いばかりしている。ツーリストを相手にしている自分たち旅行業者に相談もなければ、意見を聞こうともしない」(2012年12月)と語っていた。イベントに関わったホテル経営者や運輸業者などからは、3ヵ月経っても、宿泊費や車代などの支払いが全くされていないという不満の声が上がっていた<sup>39)</sup>。タウンでは、「当初、1千万ルピーだった予算が実際には2千万ルピーかかったらしい」と噂されている<sup>40)</sup>。5日間のプログラムも観客にはきちんと

知らされていない状態だった。最終日に国民会議派の国会議員ラフル・ガンディ (Rahul Gandhi) が突如、チャーター・ヘリコプターできて2時間だけ滞在した。この電撃的訪問は、州の政治家には感激に値するものだったが、現地の人々にはフェスティバルが政治的な宣伝に使われていることを強く印象づける結果となったようだ<sup>41)</sup>。

アルナーチャルのような辺境への旅行者は、旅のベテランが多く、イベント祭で仕掛けられた「伝統文化」の寄せ集めは「まがい物」として忌避する傾向がある。例えば、隣接するナガランドで2011年に開催されたホーンビル・フェスティバル見学の団体旅行に参加した日本人女性は、「ナガ系民族の祭典と謳っていたが、単なる観光客向けのショーにすぎなかったので失望した」と感想を述べていた。彼女は世界中を歩いた旅のベテランである。橋本和也はツーリストとは観光の対象を「まがいもの」と知りつつそれを「発見＝確認」することを「楽しみにしている」と断じる [橋本 1999: 288]。しかし、イベント祭が演出されたショー的要素を持つことを知りながらも、少しでも真正性を見出したい、それが全く感じられなければ失望するというツーリストもいる。失望の度合いが目的地までかかる日数と費用に比例するのは当然と言える<sup>42)</sup>。アルナーチャルの観光開発はイベント化に成功していない。それはチベット文化圏とトライブ居住地という異質なものを同時に州内に抱え込んでいるからである。

## 5. 聖地とツーリズム

### 5-1 シャングリ・ラという聖地

現在、アルナーチャルは「シャングリ・ラ」を謳い文句に、仏教の聖地のイメージを利用して観光開発を進めようとしている。しかし、「シャングリ・ラ」はヒルトンの小説では、チベット高地の仏教寺院がある深い峡谷に囲まれた地域で、ヒマラヤ地方には沢山あり<sup>43)</sup>、場所を特定できない。

「シャングリ・ラ」と並ぶ聖地としてペマリンがある。8世紀にインドからチベットにきた密教行者パドマサンバヴァの理想の修行地で「隠れ里伝説」の一つである。チベットのナムチャバルワ峰の北方、ペマコ (padma bkod) 付近とされ [石濱 2005: 20-21]、中国の西藏自治区の墨脱県の白瑪崗だというが、外国人の入域を厳しく規制している。アルナーチャルの西シアン県のメチュカ (Mechukha) と上シアン県のトゥーティン (Tuting) もペマコと言われるが、トライブの「メンバ」の居住地である<sup>44)</sup>。

トゥーティン近くの聖地ペマコへの巡礼ツアーを手配する会社がイタナガルにある。会社のウェブサイトでは<sup>45)</sup>、トゥーティンから中印国境地帯に跨る山岳地帯を14日間かけてテントに泊まって歩くトレッキングコースで、毎年巡礼者がいると書かれている。2006年3月にチベット仏教の高僧とペマコに巡礼にでかけたチベット文献学者のDylan Eslerは、巡礼記<sup>46)</sup>の中で、州政府はソーシャル・ワークのためにくる外国人とツーリストとを区別すべきだと書いている。外国人仏教徒の中には、山奥の学校で英語を教えるなどの社会活動の希望者もいるが、RAPの取得の義務づけはツーリストと同様である。社会活動家と巡礼者とツーリスト、微妙な違いが国境地帯では混同される。

観光と巡礼とは本質的な違いがあり、観光研究の上では峻別されるべきだと橋本和也は主張していた。本当にそうだろうか<sup>47)</sup>。聖地が絡むツーリズム、社会運動が絡むツーリズム、形態は多様である。「シャングリ・ラ」は聖地のイメージが伴い、新たな形態のツーリズムを呼び覚ます可能性がある。



写真2 タウン僧院



写真3 2012年1月のドゥンギェル祭



写真4 メラから祭りにやってきた人々

## 5-2 タウン—仏教の聖地

観光開発の事例を幾つか検討する。最初に取り上げるのはタウンで<sup>48)</sup>、アルナーチャルを代表する仏教の聖地である。ロンリー・プラネットには、推奨されるツーリスト・スポットとして、タウンとメチユカの名が挙げられている。「アルナーチャルは聖なる地上の楽園、伝説のペマコダと言われている」と書かれ、隠れ里の谷間に仏教徒が住むというロマンチックで想像をかきたてる表現が随所にある。タウンをパラダイスと賞賛したのはエルウィン Elwin である。彼はタウンに到着した時の印象を「もし、NEFA にパラダイスがあるとしたら、それはここだ、ここだ、ここだ」<sup>49)</sup>と書き残している。ノルブ Norbu はこれを引用して、「タウンは、『隠された地上の楽園』、『最後のシャングリ・ラ』と呼ばれている」[Norbu 2008: 197-198]と書いた。ロンリー・プラネットの「シャングリ・ラ」の命名は、ノルブの著書から得た可能性がある。彼はタウン県のモンパ出身の文化調査官で、タウンやモンパの歴史や文化をまとめた本を書き、現地で容易に入手できる数少ない観光案内書になっている。

タウンの名を世界に知らせたきっかけは、ダライ・ラマ14世のチベットからの亡命のニュースであった [Elwin 1964: 257]。1959年3月17日にラサを脱した法王一行80人は、2週間後にマクマホン・ラインを越えてタウンに到着した [ダライ・ラマ 1992: 155-178]。一行は、西カメン県のボムディラを経てアッサムのテズプルに移動した。ルートはモンパやシェルドックベンなどの仏教徒が多く住む地域で、法王は各地で丁重に迎えられた。タウン県と西カメン県は法王には特別な場所となった。

法王の亡命から3年後の1962年に中印国境紛争が起きて、タウンの町は10月25日に中国軍に占領された。2日前に撤退したインド軍には、僧を含む数百人の民間人が同行していた [Maxwel 1970: 370]。紛争は12月に中国軍がインドから撤退して終了したが、その後は、軍備が強化され、各地に基地が設けられている。法王は脱出後に何度かタウンを訪れているが、50年目の2009年にはタウン僧院で法王による大法要が開催された。訪問を激しく非難する中国政府に対し、法王は、「(訪問は) 政治的なものではない」としながらも、「アルナーチャルはインドの一部だ」とマスコミに述べている。アルナーチャルの帰属を明確に外部に示したことは、インドでは好意をもって受け取られた (2009年11月9日付 The Times of India)。

タウンはチベット仏教圏に興味を持つ人々にとっては、長い間あこがれの地であったが<sup>50)</sup>、外国人への開放は1998年である。途中のセ・ラ (峠) 周辺は美しい景観が広がり大小の仏教寺院があり、国内外のツーリストの多くはタウンを目指してやってくる。タウン僧院 (Gaden Namgyal Lhatse) は、ダライ・ラマ5世 (1617-82) の弟子、ロデ・ギャツォ (通称メラ・ラマ) による1680年の創建で、この地方のゲルク派の拠点で、アルナーチャル最大の歴史建造物である (写真2)。毎年チベット歴11月28

日(西暦では1月頃)に催されるトルギヤ(Torgya)祭と3年に一度のドゥンギユル(Dung-gyur)祭(写真3)、仮面舞踏や悪魔祓いなどが3日間繰り広げられ、地元のモンパだけでなく、雪の山道を越えてブータン東部のサクテンやメラの牧畜民たちも民族衣装を着て集まる(写真4)<sup>51)</sup>。元々、仏教儀礼であり観光化するつもりはない。2011年1月2日から3日間、終日会場で見学していたが、内外からのツアーリストは10人未満であった。タウンは標高3,000m前後で冬は雪が降り<sup>52)</sup>、途中のセ・ラが大雪で封鎖されると立ち往生するので、外部者の訪問は困難である<sup>53)</sup>。2011年12月にタウンの副長官(Deputy Commissioner)と会見した時に、同席した県の役人は祭をツアーリストが来やすい時期に変更すべきだと語っていたが、伝統的な宗教儀礼の日程を変更する可能性は薄い。

タウンは、ダライ・ラマ5世が遷化した後に転生者として選ばれたダライ・ラマ6世ツァンヤン・ギャムツォ(1683-1706)の生地でもある。6世は、その奔放な行動と悲劇の死、そして現在もチベットの人々に愛唱されている恋愛詩によって有名である<sup>54)</sup>。生誕地とされるオゲンリン(現在のウルゲリン)には小さな寺院が残され、堂内には6世や両親の壁画などが描かれている。タウンのベルカル村には母親の実家があり、6世の子孫にあたる家族が家を守っている。現当主のP氏は、「この地方では、妊婦は実家から出産する習慣があるので、6世もこの家で生まれたはずだ」という。仏間には6世や両親などの肖像、御物や経典などが大切に保管され<sup>55)</sup>、貴重な文化遺産である。2009年の地震の影響で、石積みの建物の外壁に亀裂が入り、修復作業が進められている。しかし、公的援助はなく費用は少数の篤志家の寄付である。生家は石造りの伝統家屋が点在する緑豊かな田園地帯にある。P氏は修復後に多くの参拝者を期待している。賽銭で日々の供物ぐらゐは賄える。しかし、タウンでは生家を資源とする意図はない<sup>56)</sup>。6世の生涯や恋愛詩に関する知識は地元のモンパには皆無に近く、学校でも教えられない。2008年夏にタウンで開かれた「モンパ会議」では、僧侶や政治家、教育関係者などのモンパ・エリートが、盛んに文化の見直し、伝統の復興を主張していたが、若者を中心にモンパの「仏教文化離れ」が進んでいる。その理由は、かつて文化的に大きな影響を受けていたチベットとの関係が中印国境紛争後に断絶し、ヒンディー語教育によるインド化が浸透していることにある。

タウンの北45kmには8世紀にパドマサンバヴァが近くの洞穴で瞑想した場所に建てられたと言われるタクツァン僧院がある。現在は、軍事上の理由で、外部者には訪問の許可が下りない。ブータンのパロにも全く同じ伝説が残る同名の僧院があり、ツアーリストが訪れる人気の観光地として有名である<sup>57)</sup>。アルナーチャルでは観光化には常に国家の辺境で国境地帯という条件が制限を掛けている<sup>58)</sup>。

タウンでも観光開発が試みられた。2010年12月28日にタウン僧院と谷を隔てた山肌に立つ尼僧院ギャンゴン・アニ・ゴンパ Gyangong Ani Gompaを結ぶ118.4mのロープウェイの開通式が行われ、筆者もこの時に立ち会った。2007年2月から3年以上の年月と3,308万9千ルピーの費用をかけて建設されたロープウェイである。高低差は164m、2,850mの標高から眺める景色は絶景であろう。通常なら、タウン僧院から尼僧院までは車と徒歩で1時間以上かかるところを8分で結ぶ。タウンの僧院長も尼僧院を監督する立場なので、往来が楽になると喜んでいて、しかし、式典に参列していた政治家たちが去った後、突然運航中止になった。通電が不安定なため、途中で止まってしまう恐れがあるからだという。周囲の人々は、「ああ、またか。だいたい、こんなに停電の多い所にロープウェイを作ること自体間違っている。工事請負会社から政治家や役人はたっぷり賄賂を受け取っているに違いない」と陰でささやき合っていた。ロープウェイは、2012年12月現在も運行されず文字通り、宙吊りのまま放置されている(写真5)。実は、ツアーリズム・インフラに関わる「作りっぱなし」の例は他にもある。バルクボンから





写真5 開通式当日のロープウェイ。  
現在も宙づりのまま放置されている。



写真6 メチユカのグルドゥワラーの内部。  
中央にグル・ナーナク、左奥にパドマ  
サンバヴァの肖像画が置かれている。

タウンに向かう幹線道路の上に2カ所のコンクリート製の建物があるが、いずれもツーリストの休憩用に作られたものである。管理人もおらず放置され廃屋となっている。これも政治家や親族の請負仕事(Contract Business)の結果で、建設後の管理方法など全く考えていない「請負仕事を創出するための建設」である。「シャングリ・ラ」イメージの創出に最適と考えられているタウンの現状は、利権の渦巻く複雑な権力作用が展開する舞台であり、観光化には程遠い状況がある。

太田好信は観光を担う「ホスト」は文化を客体化し、土着文化の復興を促す場合と、土着文化を批判的に見る場合とがあると指摘した[太田 1993: 391]。タウンのモンパは、現職の観光大臣の出身地であるが、自らの歴史や文化を客体化するまで至っていない。タウンでの課題は、ホストとゲストの関係性や、その狭間に創り上げられる「観光文化」よりも、国境地帯という国際政治の力学が働く場で生きる人々の実態をどのように把握するかなのである。

### 5-3 メチユカーシク教徒と共有する聖地

西シアン県のメチユカ(Mechukha)は、ロンリー・プラネットがタウンと共に、推奨される旅行地として挙げている。中国との国境に近く、標高は1,900メートル前後で、州都からは片道2日間はかかる。透明度の高い水が湧き出し、周囲を山に囲まれた風光明媚な場所である。地名はメンバ語のメン(葉)、チュ(水)、カ(口)、つまりメンチュカ(Manchuka)に由来し、川に注ぐ霊水を飲むと病気が治るといふ言い伝えがある。西シアン県は、北は中国の西藏自治区、南はアッサムに接する南北に長い州で、アディに属する多くのサブ・トライブが居住する。メチユカは北方に位置し、メンバ(Memba)が主要なトライブである。パドマサンバヴァが仏教経典を秘匿したという伝説が残り、その場所はネー(ne)と呼ばれている。チベット圏からネーに隠された経典を求めて、多くの高僧がこの地へきたとされ、伝説が広まって各地の人々が移住してきた[Norbu 1990: 32-33]<sup>59)</sup>。

メチユカ近辺には7つのネーがあるという。しかし、最も有名なネーにはシク教徒のグルドゥワラーもあって祈りの場となっている。洞窟を覆うように小さな建物がある。メンバはパドマサンバヴァが瞑想した所と信じているが、シク教徒は開祖で初代グルのナーナク(1469-1538)の瞑想地とする。寺院の中の祭壇には、中央にナーナクの肖像画が置かれ、左側にパドマサンバヴァの小さな肖像画が立



てかけられていた(写真6)。近くに駐留するシク教徒は、ナーナクがパドマサンバヴァに説法した場所、ナーナクが弟子と共に瞑想していた時に、熊が襲ってきたが、突然岩が落ちてきて救ったなどの伝承を得意げに話していた。確かにナーナクは、インドだけでなくムスリム最高の聖地のメッカまで行脚したと伝える[シング 1994: 40-41]。マクマホン・ラインに近いメチュカにはインド軍の基地があり、兵士の多くがシク教徒で、入口の警備員の軍人もシク教徒であった。地元のメンバによれば、1986年にシク教徒の編成部隊が派兵された時、洞窟の天井がシク教徒のターバンの形に似ていたのでグルドゥワラーにした。ナーナクの訪問は「捏造された伝説だ」と主張する。パドマサンバヴァは8世紀の人でナーナクが説法したことはありえない。地元のメンバは自らの聖地への冒涇に近い行為だと不快感をもらすが、国境に近いメチュカに住む以上は、軍隊は受け入れざるを得ない安全保障であり、反対を声高には叫べない。故郷を遠く離れて国境警備につく兵士たちへの同情もあるようだ<sup>60)</sup>。

将来、メチュカを仏教聖地として訪問する外国人観光客や巡礼客が増えた時、パドマサンバヴァの写真に比べて、ナーナクの肖像ははるかに大きいことはどのように受け取られるだろうか。地元のメンバは諦めモードである。観光化の動きは始まっている。例えば、ロンドンにあるアルナーチャルとの友好団体Friend of Arunachal Pradesh UK作成の観光促進用のウェブサイト<sup>61)</sup>には、メチュカの写真が主として使われ、美しい風景と古い仏教寺院に加えて、シク教のナーナクの瞑想の地という説明がついている。インド人観光客向けであるが、背後にはメチュカ選出の州議会議員のP氏の動きがあると見られる。彼はメンバ出身で州の観光大臣の次官を務めメチュカの売り出しを必死に試みている。近年、メチュカの観光が脚光を浴びているのは、彼のプロモーションによる<sup>62)</sup>。

メチュカの仏教寺院は荒廃している。この地で最古のサムデンヤンチャ寺院は、川に突き出した崖の上に建てられているが、途中の吊り橋は、所々壊れていて誰かの手を借りなければ、危険で渡れない。その後は30分ほど急なぬかるみの山道を登る。寺は17世紀にタワン僧院を建てたロデ・ギャツォが建立したと地元の人には説明するが、寺はゲルク派ではなく、ニンマ派に属している。ロデ・ギャツォがここへ来たという記録もない。寺には僧衣を着て剃髪した僧ではなく、ダバ(*dhapa*)と呼ばれる妻帯した半俗の僧たちが自宅から通ってきている。Tシャツに半ズボンというラフなもので、俗人と全く区別がつかない。寺院は木造の粗末な建物で、屋根はトタン葺である。古く見えないのは、下方にあった小堂が地震や火災の被害を受けて現在の位置に移されたからであるという。ロデ・ギャツォの塑像が祀られているが古くはない。かつて寺院は何度も災害に遭遇したが、その度にこの像は、自ら寺の外に逃げて、無傷だったと言いつづえられ、霊験ある像であるが、ペンキで塗り直されていて安っぽく見える。メチュカには他にも、ロデ・ギャツォが人々を先導してきたという伝説の場所がある。そこは遺跡というよりも、民間信仰の崇拜対象であったと思われる。寺院や遺跡を保存・整備する必要があるが、タワンと同様にツーリズム関連の無駄な公共工事が行われている。

2012年2月13日付のArunachal Timesにメチュカの現状を訴え、州政府に対し改善を要求する投稿記事が掲載されていた。以下はその要約である。

白い雪をかぶった山々に囲まれたメチュカは、訪れる内外の人びとから「スイスのように美しい」と言われる場所である。しかし、州の観光大臣がメチュカの観光促進のためにできるだけのことをすると言いつづえ、州首席大臣もメチュカを訪問して同様の約束をしたが、その現状はひどいものである。まず、たった一つだけあるホテルは部屋数が少ない。新しくできた観光客・ロッジは、完

成後も使われず、小学校が移転してきている。古くからあるロッジは、すでに廃墟になっている。宿泊設備と電気、インターネットなどがあればメチユカには多くのツーリストが来るようになるだろう。水力発電関係者は川の水量不足が原因だというのが、水路の管理を怠ってきたことが原因だ。米作には適さない土壌で、雑穀や野菜などを耕作しているが、現金を稼ぐために老若男女を問わず、道路工事に携わらざるを得ない。若者の雇用に関して観光には期待している。もし、州政府が観光に力を入れてくれるなら、村単位のツアー・オペレーター、ホームステイ、エコ・ツーリズムなどのビジネスによって8,000人以上の人々の将来を変えることができるだろう。

投書を読むと、電気も十分供給されていない所にツーリスト・ロッジを建設して、結局は使えなくなったという計画性のなさがわかる。メチユカのライフ・ラインの貧弱さはタウン以上で、2010年の夏と冬に調査で3週間ほど民家に滞在したが、ほぼ每晚停電で、電話が通じることはほとんどなかった。観光施設を作る前に、地元の人々には不可欠なライフ・ラインを整備する必要があるのは、タウンと同様である。しかし、聖地や寺院が荒れ放題であることには、全く触れていない。

インフラ整備が進まない理由の一つは町の中心にある軍事基地で、輸送機が発着できる軍事用の空港がある。携帯電話用の通信アンテナは自由に建てられないし、見晴らしの良い場所を自由に歩き回って写真を撮ることは禁止されている。基地の背後の川向こうの村へ行く場合でも近道の基地内の通過は外国人には許可されない。ある時、車が故障したので道端に停めて車内で高度計を見ていたところ、民間人の服装をしている軍関係者に見とがめられ、訪問目的などをしつこく聞かれた。最終的には、不問に付されたが、別れ際にやんわり言われたのは、「こんな場所へ撮影機材や高度計は持ってこない方がいい」ということだった。メチユカでは、軍隊にとっては、外国人やツーリストは招かれざる客であるようだ。観光以前の政治に関わる複雑な問題があり、地元の政治家の利権が複雑に交錯する場所が国境地帯である。観光資源には恵まれているが、将来に対する展望が開けていない。

## 6. 政治とツーリズム

### 6-1 伝統的コミュニ・アイデンティティの再稼働

ツーリズムは旅行地の治安の良好が前提条件で、「シャングリ・ラ」としてツーリストを惹きつけるために、「平和な楽園」イメージは不可欠である。アルナーチャルは比較的に治安はよかったが、近年は、州外からの圧力と、州内のトライブを背景とした問題に端を発して、イメージは崩れつつある。

近年の変化はトライブ間の紛争が表面化したことである。きっかけは州首席大臣のヘリコプター事故の直後の2011年5月4日に掲載されたTimes of India (ウェブ版)のプラディーブ・タクルPradeep Thakur記者の速報記事に端を発した。亡くなった首席大臣の後継者を予想する記事の中で、記者は「候補者の一人であるナバン・トゥキNaban Tukiは、ニシに属しているが、ニシは他のトライブと良好な関係ではない」と書いた。これに対し、「ニシの名誉を傷つけた」としてニシが組織する様々な団体から抗議の声が上がった。数日後にガロGaloに属するジャルボン・ガムリンJarbom Gamlingが新首席大臣に決定したが、アルナーチャルの場合は、州の大臣などの人事は政権与党である国民会議派の中央組織が決めるため、記事がナバン・トゥキ氏に不利に動いたという憶測もあった。抗議は次第にエスカレートし、イタナガルでは何度もゼネストが強行され、記者の逮捕、情報提供者の確定と逮捕、首席大臣の辞任が要求され、動きは收拾せずに日を追うごとにエスカレートして行った。10月26日には、

抗議集会に参加していたニシの青年一名が、警察の発砲により命を落とす事件が起き、数日間は政府系の建物や車両が暴徒に襲撃される事態に陥った。結局、首席大臣は10月31日に辞任を表明し、翌日国民会議派の指名でナバン・トゥキ氏が首席大臣に就任した。

6ヶ月にわたってニシの団体の抗議の記事が毎日地元紙に掲載され、政府の機能はマヒ状態であった。州のトライブの中で、ニシは23%、アデイが17%、ガロが10%を占めるが、3つの主要なトライブの間には、長い間、政治をめぐる争いが水面下で続いていた。暴力を伴う事態は今まではほとんどなかったが、発砲事件で死者が出た翌日には、ニシがガロを襲撃するという噂がイタナガルに広がり、ガロの人々は友人宅に身をひそめたり、故郷に避難したりとパニック状態であった<sup>63)</sup>。

しかし、ニシ出身の首席大臣が決定すると、毎日のように書き立てられていたニシからの抗議は収束し、州は表面上は平静さを取り戻した。結局、地元では政争はニシとガロの争いとみなされ、調和を保っているかに見えるトライブ間の確執が、突然暴力という形で可視化されたのである<sup>64)</sup>。

ミシュラ Mishra は、「アルナーチャルにおける開発の重要な側面は、州が主導する近代化の過程で、伝統的なコミュニティ・アイデンティティが再稼働していることだ」と指摘している [Mishra 2011: 317]。確かに、2011年に起こったトライブ間の争いも根源にはこうした動きがある。ツーリズムはホストやゲストが思いもよらなかった方向に複雑に展開していくのである。

## 6-2 少数派としての仏教徒の自治権要求とモンパのアイデンティティ

アルナーチャルの仏教については、仏教徒は州内では13.03%と少数派だという事実を忘れてはならない。そのうち、チベット系大乘仏教徒は82.2%で、17.8%をタイ系上座部仏教徒が占めている。しかし、州外の周囲の国々や地域、ブータンや中国の西藏自治区、インドのシッキム、ラダックにはチベット仏教の信奉者が多数おり、亡命チベット人は更に多くの国や地域に居住して、国際連帯の潜在力を持っている。アルナーチャルの州内だけで完結しているわけではない。

アルナーチャルではチベット仏教徒のモンパやシェルドゥクベンが、2004年ごろから有力者を中心に西カメン県、タウン県を「モン自治地域」(Mon Autonomous Region)とする自治権要求運動が繰り広げられていた。提唱者のツォナ・ゴンツェ・リンポチェ (Tshona Gontse Rinpoche: 通称TGリンポチェ) は、タウン生まれのモンパで、高名な仏教僧で、当時は州の観光・文化大臣でもあった。彼は西カメン、タウン県を州の平和地帯 (peace zone) として仏教文化を保護し、併せて観光促進を図ることを目的として活動してきた。自治権要求の案件は2008年に州議会を通過したが、中央政府を説得することはできず、運動は挫折した形となった。自治権は、インド憲法の第6付則記載の地域であることが条件だが、アルナーチャルは外されている<sup>65)</sup>。非仏教徒のトライブの中には、「自治権要求運動は、州を分断する危険な計画であった」、「リンポチェは仏教徒のことだけを考えている」という批判的な声があり、非仏教徒の声は無視できない。先に事例として挙げたブツダ・マホツァヴァは、名称は仏教儀礼であるが、内容はイベント祭である。2012年から「タウン・フェスティバル」とイベント風に英語名称に変更し、今後も恒例イベントにする予定だというのが、地元の役人の一人は、「旧名称では仏教徒中心と思われ、州内にコミューナルな問題を引き起こすから」と説明していた。現職観光大臣がタウンのモンパ出身であり、お膝元でのイベントには、こうした気遣いが必要なかもしれない。つまり、アルナーチャルの観光推進にあたっては、チベット仏教文化圏とトライブ地域圏を分けて考える必要があり、ツーリズムと政治は切り離せない関係にあることを忘れてはならない。



写真7 西カメン県ボムディラのトルギャ祭  
(2012年11月)



写真8 モンパ会議 (2010年7月31日)

自治権要求運動について、TGリンポチェは「運動は終わったわけではないが、現在は、宗教活動に専念している。誰か中心になって引き継ぐ者がいたら継続したいが、今のところそういう人物はいない」(2010年12月12日の筆者によるインタビュー)と語っていた。彼が最も危惧しているのは、モンパが仏教徒としてのアイデンティティを喪失しつつあることである。危機意識の中で仏教を自らの文化の核として再構築する動きも広がりつつある。2008年に彼がタウン僧院のトルギャ祭を参考にボムディラの自身の寺院で始めたボムディラ・トルギャ祭(写真7)もその一つである。5回目に当たる2012年11月のトルギャ祭を2日間見学した。プログラムは巧みに演出され、ツーリストも楽しめるが、仮面舞踏の合間にリンポチェの説法が入るなど、民衆教化の様相が強い。2010年夏にタウンで開催されたモンパ会議<sup>66)</sup>(写真8)でのリンポチェの発言やボムディラでのトルギャ祭についてもモンパの文化復興運動の観点から見直す必要がある。

現代社会では自分たちの文化を外に向けて発信していくには文字が必須の手段となる。しかし、州のトライブは独自の文字を持たない。仏教文化圏ではチベット文字が僧侶の間では流通するが、モンパ語は表記できない。ただし、チベット文字が読めれば、自らの歴史や仏教に関して理解が深まる。2011年から始まったボーティ語(チベット語)教育<sup>67)</sup>に即座に反応したのは、ガロなどのタニ系の言語を話す非チベット系の人たちであった。タニ・リピ(Tani Lipi)<sup>68)</sup>という文字の復活を試みる人たちが現れ、州政府に採用を呼びかけ、アディの間にも同様の動きが生じるなど、権利要求がトライブの相互に波及する現象が多発している。文字をめぐってもチベット系と非チベット系の対応は大きく異なっており、チベット仏教文化圏とトライブ地域圏は常に州を分断する可能性を秘めている。

### 6-3 「想像の共同体」の創出

アルナーチャルのツーリズムにとって更なる問題は、州南東部のナガランドとの隣接地帯で起こっている。現在、ティラップ県とロヒット県の一部そしてチャンラン県、ロンディン県(旧チャンラン県)はツーリストには開放されていない。これらの県には、ノクテNocte、ワンチョーWanchoなどのナガ系のトライブが住んでいる。この地域ではアッサムと同様に外国人排斥運動がある<sup>69)</sup>。インド政府は1964年に、バングラデシュからチャクマChakmaの難民を受け入れてアルナーチャルのチャンラン、ロ



ヒットの二県に定住させた。彼らの故地はチッタゴン・ヒルとマイメイシンプ Maymensingh 県（ダッカの北）である。これは人口過疎な「フロンティアの増強」のためで、1962年の中印国境紛争で得た教訓によるという。1996年に最高裁は、彼ら難民の市民権を認めた [Upadhyay 2009: 67, 260]。しかし、州内からは自分たちの「先住民」としての権利が侵されると排斥運動が続いている。Singh, K. Deepak は「汎アルナーチャリー意識が最も高揚するのがチャクマ排斥運動で、アルナーチャル住民の多くは、チャクマの市民権とインド国籍取得には反対していないが、彼らが『指定トライブ』としての地位を獲得することは認めない立場をとっている」と指摘した [Singh, D. K 2010: 214-217]<sup>70)</sup>。アルナーチャルという州自体が中央政府によって構築され統合性が乏しいにもかかわらず、アルナーチャリーを担い手とする「想像の共同体」<sup>71)</sup>が、外部からの難民という移住者への対抗運動の中で浮かび上がった。ただし、汎アルナーチャリーの意識が州全体に広がるかは否かは未知数である。

一方、ナガランドの政治集団 National Socialist Council of Nagalim が、アルナーチャリーに対抗してナガリム (Nagalim。大ナガランド) を中核の意識として、アルナーチャルのナガの居住地のナガランドへの併合を主張し、地域の不安定化を増長している [Mukherjee 2005: 36, 59]。そもそも、ナガは多数の少数民族の集合体で、ナガという単一の民族は存在せず [井上 2008: 53-72]、中央政府との独立運動を巡る対立を経て、ナガランドという行政区域が妥協の産物として作られたのである。しかし、皮肉にも外部との対抗を通じてナガリムに基づく「想像の共同体」の主張が登場し、中央政府ではなくアルナーチャルへと運動を展開している。

そして、アッサムとも州境を巡っての争いがある。2010年から単発的に起きていたが、2012年4月にアッサムの警官がアルナーチャル領内に入り、住民を強制排除したことで表面化し、大きな問題となった。ナガランドとアッサムの問題は、NEFA をアッサムから分離させた時に線引きを急いだためだという指摘がある<sup>72)</sup>。

政治に翻弄される地域でのツーリズムは成立するのか。「アフリカの内戦がツーリストに影響がないように、インド北東部における問題もツーリストを遠ざけはしない」という楽観的な意見 [Bhaumik 2009: 240] もあるが、ゼネストや暴力行為が生じた実例を見ると否定的に考えざるをえない。

## 7. 結論

アルナーチャルの隣州であるナガランドは、「首狩りから観光へ」と歴史の中で大きな変容を遂げてきた。鈴木正崇はその報告の中で、民族観光を開発の手段として利用するナガの在り方の変容を5段階に分けて考察している [鈴木 2004: 69]。アルナーチャルの場合には、地理的な隔絶もあり、各トライブが歩んできた歴史は、それぞれ大きく異なっている。しかし、あえて州全体の変容を段階的にとらえるならば、以下の5段階に分けられるだろう。第1は、イギリス植民地政府がその存在に注意をはらわなかった時代、第2は、イギリスがアッサムを統治し、アルナーチャルの人々を平地民の權益を侵す「野蛮な山岳民」としてインナー・ラインによって隔離していた時代、第3は、インドの独立により、「指定トライブ」として国民国家に組み込まれ、中国との緩衝地帯として認識されていった時代、第4は、中印国境紛争により、チベットとの関係が断絶し、経済的にも文化的にも完全にインドの影響下に入り、国境地帯の軍備が強化されていった時代、第5は、アッサムからの分離によって中央政府の直轄地、そして州へと昇格し、地域開発が進められつつある近現代である。1961年の初めてのセンサスや1978年の初の州議会選挙などを通じ、隔絶した地域に住んでいた人々が、初めて州全体に住む別の集団の全



体像を自ら確認した。しかし、それは同時に、アルナーチャルの全体に関わる諸問題を、伝統的なトライブ間の諸問題に帰着させて、コミユナルな対立を生む出発点ともなっている。

アルナーチャルの観光には、過去の植民地統治の歴史が大きく影響しており、政治・経済・社会・文化のいずれに於いても、その後遺症とでも言うべき問題を解決できないままになっていることが大きな障害である。言うまでもなく、観光化を妨げる最大の外的要因は、インナー・ラインとマクマホン・ラインという二つの政治境界線であり、その後に成立したインド北東部の複雑な政治状況の展開である。境界線はいずれもイギリス植民地政府が線引きをし、独立後のインドが継承した。チベット文化圏とトライブ文化圏の葛藤、トライブ間のせめぎあい、アッサムとの州境を巡る争い、ナガ系政治団体の抗議行動、チャクマ難民問題などは、全て移行期に起源を求めることができる。一方、内的要因は、インフラ整備や観光開発を計画的に進められない州政府の行政能力の低さや汚職などである。こうした中でチベット文化圏に所属するモンパやメンバが自らの文化アイデンティティを急激に喪失していく状況があり、観光による自立化や地域開発を進める余裕がなくなっている。外的要因と内的要因は全てが絡みあって双方向に作用し、観光開発だけでなく、地域開発を進めることも容易ではない。国境地帯でのツーリズムは最初から多くのリスクを日常的に背負っていることの自覚が必要である。「最後のシャングリ・ラ」というチベット系イメージの創出が、非チベット系のトライブを巻き込んで、州全体の観光開発への「離陸」take offの契機となるかどうか、暗中模索が続いている。

ただし、中国雲南省の「シャングリ・ラ」で起こっている状況は新たな可能性を示唆する。コーラス Kolas は、この地にチベットのものを求めて訪れる大量の観光客がシャングリ・ラを俗化するのではなく、逆に神聖な巡礼地、あるいは聖山を生産し、「再神聖化」(re-sacralized)してゆくと指摘した [Kolas 2008: 76-77]。その背景に、中国の文化大革命による宗教弾圧とその後の観光の導入による大転換があるが、観光客の持つ力の働きの大きさを見逃すことはできない。しかし、アルナーチャルの場合、チベット仏教文化圏では、パドマサンバヴァやダライ・ラマの聖地として、モンパやメンバが自らの文化や伝統を見直し、客体化するまでは至っていない。橋本和也の言う「観光文化」は生成の域まで達していないのである<sup>73)</sup>。

ただし、世界の旅行者が最も頼りにするガイドブックを発行するロンリー・プラネットが、いみじくも「最後のシャングリ・ラ」と名付けたことは、新たなブランド・イメージの創出を通じて観光による地域振興に繋がる可能性がある。グローバリゼーションの流れは、「辺境」地帯にまで及びつつある。「チベットの知られざる秘境」、それはまさしく西欧社会が造りだしたオリエンタリズムによる想像のイメージである。グローバリゼーションが進む中で、このイメージを逆手にとってアルナーチャルがどのような動きをするのか。「観光」が地域住民の文化に対する自意識を高め、アイデンティティを育成する [山下 1999: 170-171] だけでなく、「観光の可能性を追求すること」で新しい形の人間開発や環境保護運動を生み出す可能性もある。隣接するブータン・モデルは後者に近いが、今後のアルナーチャルが独自の「持続可能なツーリズム」に結び付けられるか否か、課題は余りに多い。「シャングリ・ラ」イメージは可能性と限界性を共に浮き彫りにする外部からの強い働きかけであるといえる。

#### 注

- 1) 州名は、サンスクリット語の「朝日が昇る地」に由来している。
- 2) インドでは、アルナーチャル、アッサム、マニプル、メガラヤ、ミゾラム、ナガランド、トリプラの北東部の7

州と、シッキムを併せて「七姉妹とイトコ」Seven Sisters and one Cousinと表現する。

- 3) [Behera 2004: 2] による。データは、1977-1998年を使用した。
- 4) インド政府の計画委員会による州の開発報告も同様である [Planning Commission 2009: 245]。
- 5) 選定には、国単位や市町村単位のトップ10もある。地域単位のトップ10の第一位はウェールズ地方の海岸部、中米のマヤの歴史文化地域、ケニア北部に次ぎ、4番目にアルナーチャルの名がある。
- 6) ハリウッドで映画化され世界的に知られたが、人物設定その他、原作とは異なる点も多い。
- 7) 「シャンバラは、ヒンドゥー教の説話文学『プラーナ』に説かれた一種の理想郷である」[田中 1994: 68] とされ、密教経典『時輪タントラ』にも典拠があるという。
- 8) ベマコ付近は係争地の最前線で、州内でも際立って道路、電気、通信などインフラ整備が遅れている。
- 9) 2011年にブータンを訪れた観光客は65,746人と過去最高を記録し、前年比56.65%増である(2012年4月6日付クエンセル)。ブータン観光に関しては、[脇田 2010] を参照されたい。
- 10) 民族観光とは民族集団の文化や生活形態の見聞や経験を目的とし、直接的な接触を試みて、エクゾチックなものを通じて異文化への興味を掻き立てる。ゲストとホストとは経済格差や文化的な異質性がある。文化観光は直接的な体験には踏み込まず、工芸品や装飾品などの購入や舞踊鑑賞に止まる。
- 11) 正式にはDirectorate of Tourism, Government of Arunachal Pradesh, イタナガルに本部がある。
- 12) 小説では、主人公のイギリス人が乗った航空機がハイジャックされヒマラヤの雪の中に墜落した。
- 13) 現在、28あるインドの州および6連邦直轄地、そしてデリー首都圏のうち三カ国もの国と国境を接している州は、シッキム・西ベンガルとアルナーチャルの3州だけである。
- 14) 2012年3月19日ティラップ(Tirap) 県西部がロンディン(Longding) 県として分割され17県である。
- 15) 本稿では、「指定トライブ」「トライブ」の用語をインドの行政用語としてカタカナ表記で使用する。
- 16) ガロは、従来は、アディの下位集団のガロン(Gallong) と他称されてきたが、数年前から自称はガロであるという名乗りが行われるようになってきている。
- 17) 2011年8月に州政府統計局から入手した資料をもとに計算した。トライブ分類に関しては、名称をめぐって異議申し立てがあり、公式な数は明らかにできないという。
- 18) イギリス植民地が区分けしたトライブへの帰属は、「人類学上の知見でも当事者の自己認識でもなく、最終的には行政当局の判断によるもの」だった[藤井 1994: 90]。現在のトライブ名称も州内から異議が提出されている。例えば、ニシの場合には、2007年まで蔑称であるダフラ(Dafla) であったが、2008年3月19日に国会で改名が認められた。
- 19) 「野蛮な部族」が現在のアルナーチャルのトライブで、イギリス人官僚は「野蛮人」(savages) と呼んだ。たとえば、[Gait 1926: 313] の報告の記述を参照。
- 20) 中印国境および紛争については、[Lamb 1966], [Maxwell 1970 (1972)], [中華人民共和国政府: 1962] などに詳しい。その是非に関しては、本論では扱わない。
- 21) 井上は、「これによって他州と同等の位置にあること、つまり国家統合が完了していることを中国に対して示す必要からの措置とも考えられる」としている[井上 2003: 56]。
- 22) Upadhyayaが、「紛争の多い北東州の中で最も平和だと信じられているアルナーチャルでさえ」[Upadhyaya 2009: 67] と表現しているように、テロも少なく、治安はよいとされてきた。
- 23) 北東評議会(North Eastern Council) が作成した。この評議会は、地域の開発計画を練り上げるために1972年成立の各州の代表から成る助言機関で、計画の実行の責任は各州にある[Behera 2004: 2]。
- 24) ガイドのライセンスはなく、運転手がガイドを兼ねている場合も多い。実際には監視がついているのではないので、法に触れない限りでは行動は自由である。
- 25) インド政府のルック・イースト政策に関連した特典と思われる。
- 26) 2011年1月にタウンに旅行に来ていたインド財務省に勤務するC氏からの情報による。この制度の詳細は、[http://persmin.nic.in/DOPT/EmployeesCorner/Acts\\_Rules/CCS\(LTC\)/contents.htm](http://persmin.nic.in/DOPT/EmployeesCorner/Acts_Rules/CCS(LTC)/contents.htm)
- 27) 2011年7月8日のArunachal Times ウェブ版は、アッサムとの州境のバルクボンとタウンを結ぶ道路に関して保守の悪さを批判し、タウンの青年指導者の談話として、「最近、国の防衛大臣がアルナーチャルにおける軍事力の強化を発表したが、現実には道路はお粗末な現状で、1962年の国境紛争の際に道路がないことで苦労したのに、半世紀たった今でもほとんど改善されていない」と報じている。

- 28) 2011年4月21日付Times of India ウェブ版は、防衛大臣がBROの不正に関する調査を高等裁判所に依頼した記事を報じた。国境地帯の道路の悪さが使用済の費用に見合わないという。この中には、アルナーチャルも含まれている。
- 29) 首席大臣は、「豊富な観光の可能性によって、この州を観光のハブにしようではないか」と檄を飛ばし、州を世界に観光地として知らしめること、多くの観光客を呼び込むためのツアー・オペレーターへの努力に期待していると述べた。そのためにはRAPやILPの取得日数を短縮し、国内観光客のILPは各地の事務所ですべての取得とする提案をしたが、進んでいない。
- 30) 土地や店舗の賃貸契約にはドライブが名義を貸している。祖父の代からアルナーチャルで商売し、子供もここで育った事例も多い。
- 31) 例外は、バングラデシュからのチャクマ難民の移住である [Bhattacharjee 2010: 333]。
- 32) マニプルでは2010年8月にインドからの分離独立を目指す過激派と治安部隊の間に銃撃戦があり、アッサムでは、2009年11月にブータンとの国境に近いナルバリ県で爆弾テロが起きている。
- 33) イギリスは外務・英連邦省、アメリカは国務省、日本は外務省の各ホームページを参照（2012年3月19日）した。
- 34) 筆者もアッサムの学生組織による道路閉鎖のため、日程変更を余儀なくされた経験がある。
- 35) 2012年3月にティラップ県を分割してできた。
- 36) この鼻の穴は、幼い時にあけられ年齢と共に大きくしてゆく [F・ハイメンドルフ 1970: 426]。
- 37) ブッダ・マホツァヴァ Buddha Mahtsavaは仏陀の「大きな祭礼」「大きな行事」を意味する（ヒンディー語）。
- 38) 筆者はこのフェスティバルを見ていないが、同年11月と12月にタウンでその様子と感想を地元の人々から聞いた。「5日間は長すぎる、3日間で十分だった」、「観光客のためではなく、政治家などのVIPゲストを招待する為のイベントだった」、と不評で、「2014年の州議会議員選挙の結果次第でタウンでの開催もなくなるかもしれない」との声が聞かれた。
- 39) 今回は、タウンにある約15軒のホテルは州外からの歌舞グループなどで満室で、観光客の数が少なかったのは、不幸中の幸いであった。受け皿が整っていないのに大きなイベントを仕掛ければ、観光客に不自由を強いることになり、観光にとっての逆宣伝になることは考えられていない。
- 40) 州政府は定期的にフェスティバルを開催する意志を表明しているというが、地元で還元されるはずの金がきちんと支払われなければ次の開催は困難であろう。
- 41) 国民会議派が主流を占める州議会にとって、故ジャワーハルラール・ネルーの曾孫で現国民会議派総裁のソニア・ガンディーの長男であるラファール・ガンディーの初のタウン訪問は、短時間とはいえ、中央とのつながりを強化する大きな出来事であったことが、フェスティバル期間の連日のArunachal Timesの興奮した報道ぶりからうかがえる。
- 42) 日本からナガランドまでは片道3日、タウンまでは、4日かかる。
- 43) 雲南省で迪慶よりも先に観光が発展していた麗江がシャングリ・ラと名づけられなかった理由は、納西族がチベット系ではなかったことによる [Kolas 2008: 8]。
- 44) 中国国内で政府が認定した55の少数民族のうちの一つである「門巴族」と同類で、東ブータンからペマコへ移動した人々だという説もある [張 1997: 19-21]。
- 45) <http://www.aborcountrytravels.com/pemako.htm> (2012年12月3日閲覧)
- 46) <http://www.nyingma.com/ogyan-cho-khor-ling/A%20Brief%20Pilgrimage%20to%20Pemako.pdf> 2006年5月に訪問した体験記 (2012年12月3日閲覧)。
- 47) 例えば、10数年前に観光客としてブータンへ出かけた日本女性が、地方の仏教寺院が祭礼に使う大掛画作成の数百万円の寄付に応じた。その縁で寺院の法要に出席するために、何度もブータンを訪問し、要請すれば招待ビザが取得でき費用もほとんど無料になることを知っていても、通常の観光客・ビザを申請して訪問している。自分の費用を寺院側に負担させては、寄付の意味がなくなるという理由である。彼女は、一般企業を定年退職し経済的に裕福ではない。また、チベットで観光客に見える人が、実は身内の供養を目的としてツアーに参加し仏教寺院で祈りを捧げていた例もある。「身分は観光客」でも「心は巡礼」と宗教的動機をもって旅する人は少なくない。当然その逆のケースもある。
- 48) タウン県は、州の最北端に位置し、東はブータン、北はチベットに接し、県の人口は、38,924人 (2001年統計)

で、モンパが主要なトライブである。

- 49) "If there is a Paradise in NEFA, this is it, this is it, this is it" [Elwin 1959a: 67].
- 50) ヒマラヤ山脈南麓一帯は、中央チベットからはモン・ユルと呼ばれていた。タワンはモン・タワンとも呼ばれ、モンパはその住民の総称で、現在はタワン県と西カメン県の指定トライブの名称である。ダライ・ラマを座主とするゲルク派の勢力が強まったのはダライ・ラマ5世(1617-82)の時代で、弟子のロデ・ギャツォ(通称メラ・ラマ)が1680年にタワン僧院を創建して以後である[Norbu 2008: 183-192]。ゲルク派政権にとっては、タワン僧院は宗教的な事務管理だけでなく、モン・タワン一帯の行政の中心地でもあった。タワンのギャンカル・ゾン<sup>ア</sup>は現在は廢墟であるが、西カメン県に現在も残るディラン・ゾンやタルン・ゾンは、タワン僧院のチベット人官吏の支配のもとで争議の調停や徴税の任を担っていた[Sarkar 1981: 4-15]。1914年のシムラー会議でタワンの北にマクマホン・ラインが引かれたが、1951年2月にインドの官吏が護衛隊と数百人のポーターを伴ってタワンに進入し、力づくでチベット人を一掃するまでチベットの支配は続いていた[Maxwell 1970: 73]。地元のモンパは、1962年の国境紛争前まで交易でチベットへでかけていた。タワンのダライ・ラマについては[脇田 2009b]で考察した。
- 51) モンパの文化や民族衣装についての考察は[脇田 2009a]を参照されたい。
- 52) 2011年も前日に雪が降ったが、一日で止み、祭に影響はなかった。
- 53) ヘリコプターが運行されていない現在、陸路しか方法がない。
- 54) その生涯や時代背景については、[Aris 1989]や[Mullin 2001]などに詳しい。恋愛詩集は、チベット語の原典が、英語、中国語、日本語に訳されているが、英語版でさえ、現地では入手できない。
- 55) 6世の死には三つの伝承がある[Mullin 2001: 263-265]。第1は、彼を廢位させようとする勢力によって1706年に捕えられ、北京に護送される途中に青海湖畔のクンガノールで亡くなったとする伝承、第2は、クンガノールでは亡くなっておらず、何十年も生きて山西省の靈山五台山でかなりの時間を過ごした。五台山では6世が晩年に訪問した時に加持した水が観光宣伝に使われているという。第3は、6世が超能力を示現して不死となったという説である。
- 56) 中国では内蒙古自治区の阿拉善盟<sup>アラシャン</sup>左旗の広宗寺(南寺)は、ダライ・ラマ6世ゆかりの寺とされ、2004年の訪問時には一帯は「賀蘭山・南寺旅游区」として大規模な観光開発が進んで、6世の創建の寺と終焉の地が観光地として大々的に宣伝されていた。
- 57) タクツァン僧院の近くには、16年ほど前に忽然と出現したとされるサンゲ・ツォ湖があり、湖水には枯れ木が林立し、神秘的な雰囲気<sup>ア</sup>を湛えている。近くには高山植物や珍しい蝶やレッサーパンダ、オグロゾルが見られる場所などがあるが、マクマホン・ラインに近く、軍事基地があるという国防上の理由で外国人は行くことができない。タワン県の北西部のゼミタン・サークル西部のパンチェン地区のムチャットとルンポの二つの村で2007年頃からWWF(世界自然保護基金)のインド支部が資金を出してエコ・ツーリズムが始まった。オグロゾルやレッサーパンダの生息地で保護のためである。モンパ(自称パンチェンパ)の居住地域で、ルンポからマクマホン・ラインまでは、徒歩で3時間ほどの距離である。実は、この二つの村は国境に近いので外国人の立ち入りが禁止され、インド人観光客が相手であるが、開店休業の状態である。2011年12月の調査時には、WWFの英語の立て看板の横に、観光客がテント代わりに泊って自炊もできるようにした平屋の小屋が建てられていた。しかし、少し奥に地元出身の現職政治家がスポンサーになって大きなパドマサンバヴァ像を建築中で、この小屋は資材置き場となり、周囲も内部もセメントと砂利で埋まり全くの廢屋であった。地元の男性の話では、ツーリズムの話は聞いて知っていたが、外国人が村を訪問できないという規則は知らなかったという。地元の人たちは来るはずのない外国人観光客を待っていた。希少動物保護を住民に委ねる見返りとして観光収入を住民に期待させたのであるが、観光客が来なければ、現金収入は得られず、地元をだました結果となる。動物保護をエコ・ツーリズムと安易に結びつけた失敗例であろう。このプロジェクトは、タワンのツアー・オペレーターでさえ計画段階から知らなかったという。水野一晴が紹介しているようにWWFの同様のプロジェクトは西カメン県のテンバンでも行われているが[水野 2012: 141]、筆者の調査では、州政府観光局もツアー・オペレーターもその内容を把握しておらず、宣伝もしていないため、未だ成功例とはならない。
- 58) 州の観光大臣は、外国人について「インド人には許されているのだから、一定のルールを決めて入城できるように軍関係者と相談して解決したい」(2011年12月9日のインタビュー)と答えていた。観光大臣の期待は、



ブータン国境を跨ぐ道路の開通である。東ブータンのタシガン県やタシヤンツェ県との往来は、地元の人々には許されているが、道路が未完成で国境越えは徒歩で1日かかる。タウン側では道路工事が進められているが、ブータン側は国境の開放と道路建設に同意していない。国境が外国人ツーリストに開かれれば、タウンへのツーリストの数は大きく増えるはずである。軍事基地近くの観光スポットへの入域許可も含め、観光が政治家の背中を押して、突破口を開く可能性は十分ある。しかし、政治家には期待できない別の問題がある。それは賄賂や汚職の蔓延である。

- 59) メンバの来歴に関しては、[Norbu 1990] や [Dutta 2006] に記載があるが、口承説話が元になっているためか、根拠や固有名詞が明確でなく、混乱が見られる。
- 60) グルドゥワーラーを案内してくれたメンバの知人は、近くの猿の顔に似た岩を兵士たちが「ハヌマンの岩」と呼んでいるとし、「こんな場所だと、あの人たちにもなにか楽しみがないとね」と語っていた。
- 61) <http://www.Visitarunachalpradesh.com/tourism.php> (2012年3月11日閲覧)。
- 62) 2012年3月9日付 Arunachal Time ウェブ版などを参照。
- 63) 当時筆者は日本にいたが、イタナガルに住むモンパの友人から国際電話でこのことを知らされた。
- 64) 各地でダム建設反対運動が起きてドライブの土地の権利保護が強調されている。一連の動きであろう。
- 65) インド北東部と憲法第6付則に関しては、[井上 2009] に詳しい。1950年施行のインド憲法第10編の第6付則は、何度か修正が与えられているが、アルナーチャルはこの地域から外されている。
- 66) モン・ユル社会文化開発協会の主催で2010年7月30日から8月1日の3日間開催され、筆者も出席した。出席者は僧侶、教育関係者、社会活動家、政府関係者などで、モンパの伝統や文化を再認識し持続させる方法が話し合われたが、観光への言及はほとんどなかった。
- 67) 自治権要求運動の中で、ポーティ語(チベット語)の公用語化も要求されたが、公用語化は、第6付則と同じく、憲法改正に関わる問題であるため、実現はしなかった。しかし、州議会で承認を受け、州内では、2011年からポーティ語教科書が作成され、タウンやメチユカで1年生から8年生までのポーティ語教育が始まっている。
- 68) タニ・リピ文字がどの程度普及していたのかは不明である。
- 69) インド独立前の東ベンガルからのベンガリー・ムスリム、独立時のベンガリー・ヒンドゥー難民などに対する排斥運動で、国内の西ベンガルなど他州からの移住者への不満も含む [井上 2003: 64-66]。
- 70) 同様の意見は、[Bhaumik 2009: 39] にも見られる。
- 71) ベネディクト・アンダーソンは、国民を「イメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」と定義し、「これを構成する人びとはその大多数の同胞を知ること、会うこともない」[Anderson 1983: 15] とする。ドライブが同胞愛のもとに居住地や言語などの違いを無視して共同体として想像される場合も国民と同様のことが言えるだろう。
- 72) 2012年5月19日付 Arunachal Times ウェブ版の投書では、民族集団の居住状況は無視してアッサムとの州境を急いで引いたためであるという Nabam Rama の意見が述べられている。
- 73) 観光開発を経済発展の起爆剤とするには多くの課題があるが、自分たちの持っている文化の力を改めて認識し直して、何が資源として重要かをランク付けして外部に提供できる道筋をつけなければならない。アルナーチャルについて知っている外部の人々は、インドの内部と外部を問わず極めて少数でしかなく、ツーリストへの情報はわずかで、何が魅力なのかさえ不明で、観光を推進する動機づけが、外的にも内的にも弱い。

#### 参考文献

##### 日文

- 中華人民共和国政府 1962『中印境界問題』外文出版社。  
 ダライ・ラマ 1992『ダライ・ラマ自伝』(山際素男訳)、文藝春秋。  
 江口信清 2010「社会的弱者と観光に関する研究」江口信清・藤巻正巳(編)『貧困の超克とツーリズム』明石書店、pp. 9-40。  
 江口信清・藤巻正巳(編) 2010『貧困の超克とツーリズム』明石書店。  
 藤井 毅 1994「ドライブと不可触民」小谷汪之(編)『カースト制度と被差別民 第2巻 西洋との出会い』明石書店、pp. 87-125。  
 藤巻正巳 2010「ツーリズム・マレーシアに動員されるオランアスリ: 必要に応じて可視化されるマレー半島の先

- 住民族』江口信清・藤巻正巳(編)『貧困の超克とツーリズム』明石書店, pp. 215-248.
- F・ハイメンドルフ 1970「ヒマラヤの蛮族」川喜田二郎(編)『現代の冒険6 未開の土地の部族』文藝春秋, pp. 365-509.
- 橋本和也 1999『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』世界思想社.
- 橋本和也 2003「観光開発と文化研究」橋本和也, 佐藤幸男(編)『観光開発と文化—南からの問いかけ』世界思想社, pp. 54-82.
- 井上恭子 2003「インド北東地方の紛争—多言語・多民族・辺境地域の苦悩」竹内進一(編)『国家・暴力・政治—アジア・アフリカの紛争をめぐって』アジア経済研究所, pp. 43-78.
- 井上恭子 2008「ナガ—辺境における民族アイデンティティの模索と闘争」綾部恒雄(監修)・金基淑(編)『講座世界の先住民族—ファースト・ピープルの現在 03 南アジア』明石書店, pp. 53-72.
- 井上恭子 2009「憲法第6付則を通してみるインド北東地方: 多民族地域における差別的保護政策の問題」近藤則夫(編)『インド民主主義体制のゆくえ—挑戦と変容』アジア経済研究所, pp. 231-265.
- 石濱裕美子 2005「シャングリラ伝説の源流」『チベット文化研究会報』29(2), pp. 18-23.
- 小磯 学・遠藤 仁 2012「赤い石がつくる道—カーネリアン・ロードをたどって」『季刊民族学』140, 千里文化財団, pp. 37-84.
- 馬 建釗 2003「中国の少数民族と民族観光業」瀬川昌久(編)『文化のディスプレイ—東北アジア諸社会における博物館, 観光, そして民族文化の再編』風響社, pp. 119-134.
- 水野一晴 2012『神祕の大地, アルナチャル—アッサム・ヒマラヤの自然とチベット人の社会』昭和堂.
- 押川文字 1981「独立後インドの指定カースト・指定部族政策の展開」『アジア経済』22(1): pp. 26-45.
- 押川文字 1995「独立後の『不可触民』—なにがどこまで変わったのか」押川文字(編)『カースト制度と被差別民 第5巻 フィールドからの現状報告』明石書店, pp. 19-111.
- 太田好信 1993「文化の客体化: 観光をととした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』日本民族学会, 57(4), pp. 383-410.
- 瀬川昌久(編) 2003『文化のディスプレイ—東北アジア諸社会における博物館, 観光, そして民族文化の再編』風響社.
- シング, コウル N.G. 1994『シク教』(高橋堯英訳), 青土社.
- 鈴木正崇 2004「首狩りからツーリズムへ—ナガランドの現在」『インド考古研究』25, pp. 41-70.
- 高寺奎一郎 2004『貧困克服のためのツーリズム—Pro-Poor Tourism』古今書院.
- 田中公明 1994『超密教 時輪タントラ』東方出版.
- ツァンヤン・ギャムツォ(ダライ・ラマ六世) 2007『ダライ・ラマ六世 恋愛彷徨詩集』(今枝由郎訳), トランスビュー.
- 山中 弘(編) 2012『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』世界思想社.
- 山下晋司 1999『バリ 観光人類学のレッスン』東京大学出版会.
- 脇田道子 2009a「表象としての民族衣装—インド, アルナチャル・プラデーシュのモンパの事例から」『人間と社会の探求 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』68, pp. 35-58.
- 脇田道子 2009b「2人のダライ・ラマとタワン」『チベット文化研究会報』33(4), pp. 15-19.
- 脇田道子 2010「ブータン東部におけるツーリズム導入に関する一考察—メラとサクテンの事例から」『人間と社会の探求 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』70, pp. 31-53.

#### 中文

- 『阿拉善広宗寺文史』2003. 中国内蒙古自治区阿拉善盟左旗広宗寺.
- 張 江華 (Zhang Jian Hua) 1997『門巴族』中国知識叢書 北京: 民族出版社.

#### 英文

- Anderson, Benedict. 1983 *Imagined Communities: Reflection on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso. (アンダーソン『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』白石 隆・さや訳, 書籍工房早山, 2007).

- Aris, Michael. 1989 *Hidden Treasures and Secret Lives: A Study of Pemalingpa (1450-1521) and the Sixth Dalai Lama (1683-1706)*. London: Kagan Paul International limited.
- Behera, M. C. (ed.) 2004 *Globalisation and Development Dilemma: Reflections from North East India*. A Mittal Publication.
- Bhattacharjee, R. P. 2010 "Population Dynamics in Arunachal Pradesh". In *Population and Development in North East India*. Bimal J. Deb (ed.), pp. 324-344. Concept Publishing Company Pvt. Ltd.
- Bhaumik, Subir. 2009 *Troubled Periphery: Crisis of India's North East*. SAGE, Cruttenden.
- Cruttenden Peter etc. (eds.) 2011 *Lonely Planet's Best in Travel 2012*. Lonely Planet Publications Pty Ltd.
- Dutta, D. K. 2006 *The Membas of Mechukha Valley: Arunachal Pradesh*. Government of Arunachal Pradesh, Department of Cultural Affairs, Directorate of Research.
- Elwin, Verrie. 1959a *The Art of the North-East Frontier of India*. North-East Frontier Agency.
- Elwin, Verrie. 1959b *A Philosophy for NEFA*. North-East Frontier Agency.
- Elwin, Verrie. 1964 *The Tribal World of Verrier Elwin, An Autobiography*. Oxford University Press.
- Fürer-Haimendorf, Christoph von. 1980 *A Himalayan Tribe: From Cattle to Cash*. Vikas Publishing House.
- Fürer-Haimendorf, Christoph von. 1982 *Highlanders of Arunachal Pradesh: Anthropological Research in North-East India*. Vikas Publishing House.
- Gait, Edward. 1926 *A History of Assam*. Thacker, Spink & Co. (ゲイト『アッサム史』民族学研究調査部訳, 三省堂, 1945).
- Gaur, K. D. & Rachita Rana. 2008 "Note on Economic Development of Arunachal Pradesh". In *Economy of Arunachal Pradesh: Problems, Performances and Prospects*. Manish Sharma (ed.), pp. 208-215. DVS Publishers: Guwahati.
- Government of Arunachal Pradesh. 2010 *Gazetteer of India Arunachal Pradesh: State Gazetteer of Arunachal Pradesh Vol. 1*. Government of Arunachal Pradesh, Gazetteer Department.
- Hilton, James. 1933 *Lost Horison*. William Morrow & Company, Inc. (ヒルトン『失われた地平線』増野正衛訳, 新潮文庫, 1959. 安達昭雄訳, 角川文庫, 1973. 池 央耿訳, 河出文庫, 2011).
- Jafari, Jafar. 2001 "The Scientification of Tourism", In *Hosts and Guests Revisited: Tourism Issues and the 21st Century*. Department of Anthropology, California State University, Cognizant Communication Corporation. Valen, L. Smith and Maryann, Brent (eds.), pp. 28-41.
- Kolas, Ashild. 2008 *Tourism and Tibetan Culture in Transition: A place called Shangrila*. Routledge.
- Lamb, Alastair. 1966 *The McMahon Line: A Study in the relation between India China and Tibet, 1904-1914*. Routledge & Kegan Paul.
- Maxwell, Neville. 1970 *India's China War*. Jaico Publishing House. (マックスウェル『中印国境紛争—その背景と今後』前田寿夫訳, 時事通信社, 1972).
- Mibang, Tamo. 1994 *Social Change in Arunachal Pradesh: (The Minyongs) 1947-1981*. Omsons Publication.
- Mishra, Deepak K. 2011 "Interrogating 'Community Management' State, Market and Community in Arunachal's Agrarian Transition". In *Understanding North East India: Cultural Diversities, Insurgency and Identities*. Madhu Rajput (ed.), pp. 298-325.
- Mukherjee, J. R. 2005 *An Insider's Experience of Insurgency in India's North-East*. Anthem Press.
- Mullin, H. Glenn. 2001 *The Fourteen Dalai Lamas: A Sacred Legacy of Reincarnation*. Clear Light Publishers.
- Nair, P. T. 1985 *Tribes of Arunachal Pradesh*. Spectrum Publications.
- Norbu, Tsewang. 1990 The Origin and Migration of the Membas. In *Aspects of Culture and Custom of Arunachal Pradesh*. P.C. Dutta and D.K. Duarah (eds.), pp. 31-33. Director of Research, Government of Arunachal Pradesh.
- Norbu, Tsewang. 2008 *The Monpas of Tawang: Arunachal Pradesh*. Department of Cultural Affairs, Directorate of Research, Government of Arunachal Pradesh.
- Osik, N. N. 1996 *A Brief history of Arunachal Pradesh*. Omsons Publications.
- Osik, N. N. 1999 *Modern History of Arunachal Pradesh (1825-1997)*. Himalayan Publishers.
- Pakem, B. 1999 *Coalition Politics in North-East India*. Regency Publication.

- Peter etc. (eds.) 2011 *Lonely Planet Best in Travel 2012*. Lonely Planet Publishing Pty Ltd.
- Planning Commission, Government of India. 2009 *Arunachal Pradesh Development Report*. Academic Foundation.
- Rustomji, Nari. 1983 *Imperilled Frontiers: India's North-Eastern Borderlands*. Oxford University Press.
- Sarkar, Niranjana. 1981 *Tawang Monastery*. Director of Reserch, Government of Arunachal Pradesh.
- Scofield, John. 1974 "Bhutan Crowns A New Dragon King". In *National Geographic*. 146(4): 546-571.
- Singh, Deepak, K. 2010 *Stateless in South Asia: The Chakmas between Bangladesh and India*. SAGE.
- Smith, Valene, L. (ed.) 1989 *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. (Second edition) (『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』三村浩史監訳, 勁草書房, 1991).
- Upadhyay, Archana. 2009 *India's Fragile Borderlands: The Dynamics of Terrorism in North East India*. L. B. Tauris.
- Urry, John. 1990 *The Tourist Gaze: Leisure and travel in Contemporary Societies*. SAGE Publications. (アーリ『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦訳, 法政大学出版局, 1995).